1999-WINTER

7

kawaraban namazu

瓦版なまず　第7号
1999年12月25日発行
編集人：寺田 匡宏
発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4　神港金属(株)内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 E-mail;kioku@kh.rim.or.jp

【読む】

心を寄せるということ

―『百合 亡き人の居場所、希望のありか 』を読んで―

市村　登和

母校同窓会の会報で、在校生が阪神・淡路大震災で亡くなったことを知った。在校生ではただひとり。当時中学２年生だった中北百合さん。私自身すでに歩んでしまった中学２年生の頃を思い、そこで歩みが止まってしまった彼女のことは、ひとつの気がかりとして心に残っていた。

それから４年が過ぎ、亡くなった彼女の級友たちは、1999 年２月母校を巣立っていった。そして６月に本書が出版され、彼女がそこに在ることを知った。

「かあさん元気だして？　また陶芸いったら？」という百合さんの声を、百合さんの母親の中北富代さんが聞いたのは、地震から半年後の夏の日だった。「生前そのままの声だった」という富代さんの言葉を、インタビューしたジャーナリストの河村直哉氏は書き記している。また、その声は富代さんにだけでなく、時を経て、取材した河村氏へも届いた。「死者が語ったこのことばを、ぼくは何度も心の中でつぶやいている。その声はいつしか

（日販通信社発行、星雲社発売・1,400円）
かわむら・なおや
昭和生まれ。産経新聞記者。
なかきた・こう
昭和生まれ。家族は百合さんを含めて3人。

百合　亡き人の居場所、希望のありか

河村 直哉・中北 幸・家族 著

生と死関係づける震災で逝った少女

評者・西垣 通

一九九五年一月一七日、阪神大震災で中北百合さんという中学二年の少女が犠牲になった。地震がなければ、今ごろその姿は会社のキャンパスを愛らしく彩っていたろう。以来、百合さんのご家族とって、クリスマスも新年もなくなってしまった。

だが、少女は決して消えなかったわけではない。くり返し親しい人の夢のなかに、いや白昼でさえも、最愛れた街角を地がってまと現れ、いっこり笑いかける。

ときに江戸元で動ましの言葉をささやく。

重い、眠りなく重い悲哀を一人のジャーナリストが丸ごと受けとめ、この稀有の本はできあがった。

なぜ場合かといえば、ジャーナリズムはつねに新奇なもの、面白くなる情報ばかり追い求めるからだ。震災からもう四年半、世間はそろそろ忘れかけている。無数の死者の魂は、数多くの遺族の一つにすぎない。母の嘆きも、父の涙も、遺族の悲しみ、以上のニュースバリューは持たないのである。

だが、ニュースバリューっていったい何だ？　平凡な死っていったい何だ？

ルワンダやコソボで何万人のひとたちが死んでいった。ペリーの国だけでも、白髪で、交通事故で、幾つものが失われている。それら個々に対数字としての「平凡な死」にすぎないのだろうか。

少女が好きだった「クセサリー」小物屋に行けば、まばゆい収穫のあいだの一瞬の背りで、「雪のあわずかなふるえのうちに、「かっていた人たちのかすかな息づかい」を感きとることができるだろう。

百合さんの死は平凡な死ではなく、「普遍的な死」なのだ。その死を通して「生と死を関係づけられ、周囲の人々の生が励かれるような、普遍的な死……。

死者が生者を生かす。

この本を読み、われわれの眼は生活の中にとんでもない深いものが秘いてくるなら、それは確かに、ただ一人の少女からのプレゼントなのである。（東大教授）

朝日新聞　1999年8月8日　書評面

かすかに、ぼく自身に聞こえている気がする」と、河村氏は言う。最初の取材で百合さんの話を聞いたのち、いつとなくよみがえる百合さんの声に、そして百合さんだけではなく「ものいわぬあまたの死者」のつぶやきに対して、河村氏は「死者について耳をすませ、語り、そのことばを書き留めていく」自らの使命を直感しているのだ。〝取材者〟という立場で次々とニュースソースを追うだけではない。河村氏はまず自分が関わった取材に対して、まず立ち止まり、自らつぶやいてみる作業を無意識のうちに為しているのではないだろうか。河村氏のそのような心向きに生きる根本は、いったいどこにあるのだろうか。

本書は、21 回にわたる河村氏のインタビューをもとにして、百合さんのご遺族・中北家の家族の語りが綴られている部分と、河村氏自身の語りが綴られている部分が、織りまざりながら進行していく。しかし、その冒頭で「この本は、阪神・淡路大震災で娘を失ったある家族の語りをまとめている。しかし震災を主題としたものではない」と宣言している。では、なにがいったい主題なのだろうか。

この問いには様々な答えがあるのかもしれないが、私はインタビューの中で答える富代さんの次の言葉が印象深い。

――……気持ちを寄せるといいますか。べつに、そうしたからといって、なんにもならないかもしれません。でもそれが、ある意味では祈りに通じているのかもしれません。

――

「かあさん、元気だして？　また陶芸いったら？」　このことばに励まされた富代さんは、中断していた陶芸を再び始めた。そして、「百合とかあさん」の〝と展〟を 1999 年 1 月 1 7 日に自宅で開いた。「これからもつづけていきたいな」と、本書には記されている。2000 年のテーマは「あかり」。「未来をになうはずの命」を思って……。その次の年、2001 年のテーマは「時」。「21 世紀に時を刻めなかった」思いを胸に……。

また、本の印税を震災遺児への基金にゆだねたいと考えられているとも聞いた。

心を寄せる思いがあたたかく伝わってくる。

(河村直哉・中北幸家族共著、国際通信社発行、星雲社発売、1999 年 6 月刊、1600 円)

お知らせ

最終ページに記載したとおり、2000 年 1 月 16 日、東京から大門正克氏をお招きして「『百合』を読む会」を開催します。著者の河村直哉さんも来られる予定です。ぜひご参加下さい。

関西国際大学 公開講座

災厄を綴り、継いでいくために―阪神大震災を表現する―

季村敏夫「言葉を残すこと、言葉が残ること」　上念省三「演劇の言葉、ひとりの言葉」

2000 年 1 月 22 日(土) 1 時 10 分～4 時 30 分　入場無料

三木市志染町青山 1-18　神戸電鉄緑が丘駅　神戸地下鉄西神中央からスクールバス

事前申込制です　同大学エクステンションセンターまで　0794-84-3505

【声】

集まって人が住むということ 2

―被災マンションと法律①―

佐々木 和子

「震災全壊で再建 マンション完成 建て替え巡り訴訟に発展」、朝日新聞の記事が目をひいた(1999年11月13日付夕刊)。

マンションの名前は「芦屋ハイタウン」。被災地で「建替決議無効確認訴訟」のおこなわれている4つのマンションのうちの1つである。そういえば、1週間前に分譲を知らせる折り込み広告がはいっていたのを思い出す。

グランドパレス高羽の「建替決議無効確認訴訟」に判決が下されたのは今年の6月21日。その後、何度か新聞紙上でマンションの再建をめぐる話題が取り上げられた。いずれも、再建にいたる合意形成への公的支援の必要性が論じられていた。

被災マンションに限らず、マンションなどの分譲共同住宅について定める基本的な法律は「建物の区分所有などに関する法律(以下「区分所有法」)」。「1棟の建物に構造上区分された数個の部分で独立」して建物として利用する所有者のためのもの。「集まって住む」ための法律である。一般に「マンション法」とも呼ばれている。

1962年(昭和32)4月成立、翌63年4月実施した同法は、1983年(昭和58)5月大改正された。区分所有者の5分の4以上の賛成多数で建て替えができる条項も、この時付け加えられた。しかも、賛成者は反対者に売り渡し請求をおこなうことができるようになった。ただし、これには「過分の費用がかかる」、つまり補修するより建て替える方が安価な場合という要件が必要。「費用の過分性」は、少数の反対者の住まいを強制力を伴って奪うことができる建て替えに、一定の客観的要件をつけたものであった。この「費用の過分性」の基準が示されていないことから、神戸地裁の判断が注目された。

判決では、「建物の効用の維持、回復に必要な費用は、建物の使用目的や効用の要求水準という区分所有者の価値判断に左右されるもの……多数の区分所有者らの主観的判断は可及的に尊重されるべきである」とした。この「主観的判断」をもとに、「費用の過分性」を認定し、補修派の要求を棄却した。

「裁判所の判断も私たち素人の判断も同じなんだな」、判決骨子を聞いたときの印象である。多数による決議の重みも改めて感じた。「多数の意思の尊重」、これは多数決による建て替えを導入した理由と合致する。1983年の改正は、老朽化していくマンションの建て替えをスムーズにおこなうためであった。「多数決で決まったんだから従うべきよ」、判決の日、傍聴席で聞こえてきた建て替え派と思われる人たちの声でもある。

朝日新聞のアンケートによると、「マンション再建に要した費用は一戸平均2170万円」だったという(9月27日付朝刊)。分譲マンションでは、購入時期、ローンの額、年齢、職業など各人の事情も千差万別。建て替えに、参加したくても参加できない人たちも存在する。完成した再建マンションに、どれくらいの人がもどってこられたのだろうか。「再建」とは、「復興」とは一体何なのだろうと、「眺望ひときわ、全戸南向き。憧憬のマンション 芦屋ハイタウン誕生」のチラシを手に考えた。

【お知らせ】

「震災・まちのアーカイブ」所蔵資料閲覧のご案内

私たちが、震災の資料を後世に伝えるために活動をはじめ、2年がたちます。「震災・活動記録室」から引き継いだ資料を整理すること、一人一人が震災を振りかえるため「アーカイブ」をまちの中につくること、そのなかで記憶と記録について考えることを念頭に活動をおこなってきました。

「震災・活動記録室」から引き継いだ資料と、その後集まってきた一次資料・図書など、所蔵資料の整理がある程度整いましたので、完了分から順次公開します。

資料閲覧は長田区東尻池の「震災・まちのアーカイブ」事務所でおこないます。その場所がひとりひとりにとって、震災の記憶と記録を考えるための場所、出会いの場所となることを願っています。

■閲覧していただける資料

(点数は1999年12月25日現在)

1.震災一次資料

灘ボランティアセンター資料 26点

中央区ボランティアセンター資料 182点

地震直後から灘区と中央区で活動したボランティアセンターの一次資料。ボランティア組織の実態や活動の詳細、震災直後のまちの様子が分かります。(「震災・活動記録室」引き継ぎ資料)

<震災ボランティア>団体の資料 約250団体

「震災・活動記録室」から引き継いだ資料。1995年5月の「やったことを残すボランティア大集会」での資料の保存の呼びかけに賛同して寄せられた資料です。地震直後、どんな団体が、どんな活動をしていたのか、ほぼ網羅的に知ることができます。

浜畑啓吾氏寄贈資料

地震直後の医療現場の資料です。どんな医療活動がおこなわれていたのか知ることができます。

「震災・活動記録室」資料

「震災・まちのアーカイブ」の前身である「震災・活動記録室」の資料。地震後の<震災ボランティア団体>へのアンケートや、災害公営住宅マップ作成の資料があります。

2.震災一次資料所在調査目録

被災地のどこにどんな震災一次資料があるのか。震災・まちのアーカイブの活動の中で作成した目録をご覧いただけます。

3.ミニコミ 約140タイトル

震災・まちのアーカイブが独自に収集した史料のほか、「震災・活動記録室」から引き継いだ資料と「阪神淡路コミュニティ基金」から寄贈をうけた資料からなっています。

4.図書 約1100点

震災関連資料保存機関の目録

被災地内外で、どんな震災資料がどこに所蔵されているのか知ることができます。

自治体発行の阪神大震災「復興誌」

震災後、被災自治体はそれぞれ復興誌を発行しました。それらをまとまって閲覧することができます。

震災の手記

阪神大震災では多くの人が手記をまとめました。市販されたものに加えて、私家版の手記も所蔵しています。

震災の報告書

阪神大震災に際しては、多くの調査が行われましたが、その報告書は必ずしも一般に出回っていません。行政、研究機関ほか民

間団体の調査報告書を所蔵しています。

震災の詩集

阪神大震災に際しては多くの詩集が発行されました。震災後発行された詩集を、ほかでは入手・閲覧しにくい詩集もふくめ、まとまって読むことができます。(季村敏夫氏寄託)

震災と思想・文化に関する図書

震災は、文化や思想にとってどのような意味があったのか。阪神大震災を、文化と思想の側面からとらえようとした図書を集めました。

記録・記憶をめぐる現代思想の図書

今、世界では記録や記憶をめぐって様々な議論がおこなわれています。現代思想の中で記録・記憶の意味を考えるための図書を集めました。

記録という営為をめぐる図書

記録とはいったいどんな意味を持つ行為なのか。広島、水俣、アウシュヴィッツ(ショアー)、ユーゴ紛争などで真摯に取り組まれた記録の意味を問う活動に関する図書を集めました。

市民による公共性を考えるための図書

地震後、ボランティアやＮＰＯという言葉が注目されました。ではその中でどのような公共性が生まれているのか。その手がかりとなる本を集めました。

5. ビデオ　約 100 本

テレビ番組録画ビデオ

震災後、さまざまな震災関連の番組が放映されました。地震直後からテレビで放映された震災関係の番組を録画したビデオを保管しています。放映されたテレビ番組(ニュース報道を除く特集番組)の大半を所蔵しています。

プロダクション制作ビデオ

震災関連のドキュメンタリー映画などを閲覧することができます。

6. 新聞切り抜き　大型ファイル 20 冊

1996年6月～ 99 年 5 月までの新聞切り抜きを閲覧していただけます。(阪神淡路コミュニティ基金寄贈資料)。

7. 声のライブラリー　カセットテープ 110 本

震災直後から行った、ボランティア団体などへのインタビューテープを保管しています。(「震災・活動記録室」引き継ぎ資料)

■ご利用にあたっては……

上記の資料はどなたでも閲覧していただくことができます。ただし、一次資料の閲覧・利用に際しては、事前にご連絡下さい。コピーサービスもおこなっています。(1枚 10 円。資料によってはコピーできないものがあります)。資料の貸し出しは原則としておこなっていません。ただし、図書は、会員に限って貸し出しをおこなっています。

■開室日

第1・3木曜、第2・4土曜　10:00 ～ 17:00

なるべく事前にお電話で開室を確認して下さい。また、これ以外の開室もご希望があればご相談下さい。

協力して下さった方々 (1999年7月～12月)

ありがとうございました。お名前を記して感謝いたします。(敬称略)

■活動助成金　トヨタ財団

■カンパ・会費　今枝一夫、片岡法子、貞丸節子、高野紀子、達脇明子、平戸潤也

■資料寄贈　星合保子　地震直後の海外新聞・雑誌

【報告】

かわら版となまず絵が照らしだす現在

―東大総合研究博物館「ニュースの誕生」を見て―

寺田 匡宏

東京大学総合研究博物館の「ニュースの誕生―かわら版と新聞錦絵の情報世界―」を見た。

なぜ、わざわざ東京まで出かけたのか。ひとつは、かわら版についての興味である。本誌は、「瓦版なまず」を名乗っている。では、そのかわら版の実物は一体どのようなもので、それはどんな歴史を持っているのか。いまひとつは、今回の展示の中心である小野秀雄コレクションとは何か、という関心である。かわら版、なまず絵、新聞錦絵を集めたこの人物はいったいどんな人なのか。そして、第三の、最大の理由は、阪神大震災がどう語られているのか、ということである。江戸時代から明治はじめの瓦版と新聞錦絵をテーマとした展示で、現代の事件である阪神大震災はどのように語られているのだろうか。

まず、本展の最大の見どころは、やはり小野秀雄コレクションという資料群に即した展示がおこなわれていたことであろう。小野秀雄は、東京大学新聞研究所の創設者で、メディア研究のためにかわら版をあつめたという。歴史を知るためには、資料が必要なのだ。阪神大震災の後、「なまず絵」が注目をあび、改めて安政江戸地震が念頭にのぼった。なぜ、現代の地震で安政の地震が思いおこされたのか。それは、なまず絵という資料が収集保存されていたからである。今回の展示も、小野の集めた資料群をまとめて見ることで、資料の収集保存の意味を考えることができる展示だった。

約 700 点にのぼる小野コレクションの半分を占めるのが、災害の史料である。では、この展示で、震災はどのように語られていたのだろうか。とくに、阪神大震災はどうあつかわれていたのか。

一番奥まった展示室の約半分が地震関係のかわら版、なまず絵、絵はがきにあてられている。入口ではスライド映写機が、安政江戸地震、濃尾地震、関東大震災、そして阪神大震災の光景をエンドレスで映しだす。スライドをじっと見ていると、古い白黒写真にまじって、見慣れた風景が映しだされるのに気づいた。あれは、阪急夙川駅西の倒壊したビルではないか。あれは、震災写真集で見た湾岸高速……。この空間には、江戸時代のかわら版と現代のスライドが混在している。時空のへだたりをつなぐのが、地震という災害である。考えてみれば、あの時、私たちは、「ニュースの誕生」の現場に居あわせたのだ。その体験は、江戸時代の地震ともつながる。

神戸で震災を体験し、この企画にたずさわった木下直之氏(東大助教授・美術史)は、阪神大震災と安政江戸地震では社会状況が違うこと認めたうえで、こう言う。「それでもなお、安政大地震の災害報道の検証は、ひるがえって現代の災害報道がどのように出来上がっているかを教えてくれる。」(『Ouroboros』9)

「検証」という言葉が、震災5年を目前にして目につく。安政江戸地震は、140 年後に新しい光をあてられ、そしてその光が、改めて現在を照らしだした。阪神大震災の検証は、どこまでの深さと広がり、普遍性を持てるだろうか。この展示は、震災を体験した歴史家からの問いかけである、というのは深読みだろうか。

東大総合研究博物館企画展示 東大コレクションⅨ「ニュースの誕生―かわら版と新聞錦絵の情報世界―」1999 年 10 月 8 日～12 月 12 日(12 月 1 日見学)。図録：木下直之・吉見俊哉(編)『ニュースの誕生』東京大学出版会、1999 年。

「震災・まちのアーカイブ」活動日誌

(1999年11月～12月)

11月1日(月)　『瓦版なまず』6号発行・発送。

11月4日(木)　開室日。鷹取中学校避難所資料の現地整理。野田高校避難所資料を保存している喫茶店「アール」を訪問。

11月13日(土)　開室日。神戸新聞生活文化部記者・青戸勝俊氏来所。震災5周年特集記事に向けての取材。NHK 大阪放送局報道部ディレクター堅達京子氏来所、震災5周年記念番組作成に向けての取材。

11月15日(月)　NHK 大阪放送局報道部ディレクター仙波加奈子氏来所。報道番組「発信基地」の取材。

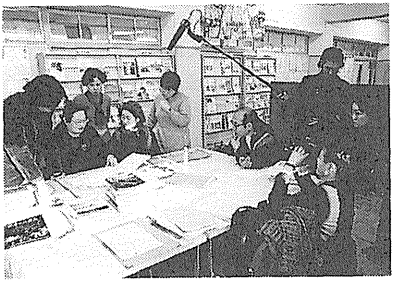
11月18日(木)　開室日。NHK ディレクター堅達京子氏来所。季村敏夫氏にインタビュー。

11月27日(土)　開室日。神戸新聞記者青戸勝俊氏来所。NHK ディレクター仙波加奈子来所。京都工芸繊維大学助手(建築史)笠原一人氏来所。

12月1日(水)　寺田匡宏、東京へ研修。東京大学総合研究博物館「ニュースの誕生―かわら版と新聞錦絵の情報世界」見学、アジア太平洋資料センター(PARC)見学。

12月2日(木)　開室日。NHK「発信基地」取材(仙波加奈子ディレクター)。午後から喫茶「アール」で震災一次資料の保存状態の聞き取り。

12月4日(土)　NHK「発信基地」取材。鷹取中学にて避難所資料の現地調査。神生善美さん同席。同中学で避難所時代「お弁当つくり隊」として活動した河本秀子さんへの聞き取りと資料所蔵状況調査。



12月11日(土)　開室日。「市民活動センター・神戸」八十庸子氏来所。「震災・活動記録室」の一次資料を引き継ぎ。毎日新聞学芸部記者岸桂子氏来所。資料の収集、公開の状況について取材。夕方から忘年会。参加者13人。NHK「発信基地」放映。午後6時10分～40分。アーカイブの資料調査などの様子が採り上げられる。

「震災・まちのアーカイブ」会員募集のお知らせ

「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しています。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。

賛助会員も募集しています。賛助会員には、『瓦版なまず』(季刊予定)、『なまずブックレット』、『阪神大震災　さまざまな声の栞』、研究会の案内をお届けします。アーカイブ所蔵資料の利用・貸し出しを行うこともできます。年会費は1口1000円。振り込みは、郵便振替　00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

震災・まちのアーカイブ
読書会と講演会のお知らせ

■読書会　『百合』を読む会

地震から5年がたちます。5回目の1月17日をどう迎えるべきなのか。震災5年目を、私たちは、1冊の本とともに過ごしたいと思います。『百合』は、中学2年生の娘をなくした家族と、ひとりのジャーナリストの対話の記録です。その言葉をたどりながら震災とは何だったのか考えたいと思います。

大門 正克 氏「いくつもの、つながりの中で生きる
―『百合』『地中の廃墟から』、そしてまた『百合』へ―」

※大門氏は、日本近現代史専攻の歴史学研究者(都留文科大学教授)。現代歴史学の課題を考える鍵として阪神大震災の問題に一貫して注目しておられます。

※著者の河村直哉氏も来られる予定です。

※【テキスト】河村直哉・中北幸家族『百合―亡き人の居場所、希望のありか―』(星雲社、1999年、1600円)。【参考】河村直哉『地中の廃墟から―〈大阪砲兵工廠〉に見る日本人の20世紀―』(作品社、1999年、2200円)

2000年1月16日(土)1時～4時　「震災・まちのアーカイブ」事務所にて
参加ご希望の方は事前にご連絡下さい。連絡先：季村範江 078-781-8891

■記録と記憶を考える講演会

資料とはいったいなにか。資料はどのようにして資料になるのか。震災資料の収集に取り組む私たちは、この問いに直面しています。しかし、これは、震災だけの問題ではありません。いったい人は痕跡をどう残すのか。現在、夭折の詩人、中原中也の新しい全集の編纂が進んでいます(角川書店から来春刊行予定)。その編纂にたずさわる詩人佐々木幹郎氏に資料の収集、その解釈の仕方、公開と保存の方法についてお話ししていただきます。

佐々木 幹郎 氏
「資料のぬくもり
―中原中也全集編集から見えてきたもの―」

※佐々木氏は、詩人。著書に『中原中也』(筑摩書房、サントリー学芸賞)、『蜜蜂取り』(書肆山田、高見順賞)ほか。

2000年2月26日(土)1時～3時
「震災・まちのアーカイブ」事務所にて　会費500円(資料・茶菓代)
参加ご希望の方は事前にご連絡下さい。連絡先：季村範江 078-781-8891

2000-summer

8

瓦版なまず

kawaraban namazu

瓦版なまず
2000年8月13日発行
編集人：寺田匡宏
発行人：季村範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022神戸市長田区東尻池町1-11-4　神港金属㈱内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 e-mail;kioku@kh.rim.or.jp

【特集・メモリアルセンターと公論】

今、なぜメモリアルセンターと公論か

寺田　匡宏

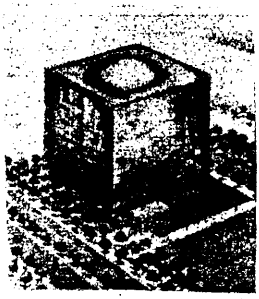
地震から６度目の夏である。

真夏の長田を歩く。区画整理のため真新しく造成された更地が、太陽に白い地肌を晒し、移転で取り壊された建物の基礎や鉄筋が、公費解体の後の風景を思い出させる。あの日、炎に晒されていた街路樹のプラタナスが木陰をつくっている。５年前の夏の照りつける強い日差しの記憶がよみがえる。

菅原市場は新しい市場の建設を控え、また仮設の店舗に移った。移転前のプレハブがあった場所は工事のため更地となり、どんな建物だったか、記憶の中に風景を探るしかない。

その北側にある小学校、そこで学ぶ子どもたちの中には、もう震災の体験を記憶として持たない子も交じっているのだと思い当たる。

５年という区切りを過ぎ、震災の記憶と記録をめぐる動きがあわただしい。とりわけ重要なのが、国・県によって推進されている阪神・淡路大震災メモリアルセンターの建設計画



メモリアルセンターの外観　左から鳥瞰・夜景・断面イメージ（「技術提案書」昭和設計㈱より）

である。

この施設は、震災を「風化させることなく、大震災の経験やこれから得た貴重な教訓を絶えず広く内外に発信し、全世界の共通財産として継承する」(兵庫県の計画書)ための施設であり、総費用60億円をかけ、神戸脇浜に建設される。

大震災の教訓を発信することは、震災を体験したもの全てに関わることであり、あらゆる英知を結集させねばならない事柄である。しかし、今、メモリアルセンターについて多くの人がその重要性を認識し、議論を行っているか。答えは限りなく「否」に近い。重要なことが議論されないまま計画が進んでいる。現状に一石を投じる必要があると考え、特集くメモリアルセンターと公論>を企画する。

センター設置の経緯と概要を見よう。

阪神大震災は、記録することに関わる問題を私たちに投げかけた出来事だった。震災直後から震災に関わる手記、体験記が、おびただしく出版され、震災の記録を残すことを目標としたNPOが設立された。神戸大学図書館「震災文庫」をはじめとして、公共機関による震災の記録を残すための動きも様々に取り組まれた。

一方「震災博物館」という考えは震災直後から行政の唱えるところであった。1997年1月には震災の教訓を残すため、兵庫県の外郭団体である、(財)阪神・淡路大震災記念協会が発足し、将来の震災博物館に備えた資料収集が始められていた。

メモリアルセンター計画が加速しはじめたのは、昨1999年である。兵庫県が国に要望を重ね、11月には1999年度補正予算に施設整備の補助金が計上され、センターの設置が決定した。

それ以降、2000年2月に、建築業者の選定(昭和設計㈱)、5月に展示計画の骨子の発表、7月に県民からの展示に関するアイデアの募集、と計画が進み、センターの開設は2002年3月が予定されている。

センターの骨子は兵庫県のホームページで公開されている(http://web.pref.hyogo.jp/hukkou/memoriaru/centergaiyou.htm)。それによると、ライブラリー、展示、研究、交流などの部門が設けられる。県担当者への取材によると、すでに建物内での配置が決まり、展示業者や映画監督が展示内容を検討しているところだという。

さて、なぜ、今メモリアルセンターと公論なのか。第一に、以上の経緯に関わっているのが、県の担当者と、委員、建築業者や展示業者などに限られ、それに関するつっこんだ報道が行われたり、震災に関係する各種の専門家が公にメモリアルセンターに関して発言することが、ほぼ皆無に近かったからである。第二に、震災は記録や記憶に関わる問題を私たちに投げかけ、それに関わる様々な営為が、5年間営まれてきたが、その蓄積が必ずしも十分に取り入れられていないからである。現状ではメモリアルセンターは公論の上に建設が進められているとは言い難い。

メモリアルセンターは、震災の記録と記憶を扱う施設であり、震災を体験したものすべてに関係する。現在県の進めている計画を点検し、公開の議論の中で建設を進める必要がある。必要なのは、メモリアルセンターに関わる公論であり、その公論を基盤に建設されてこそ、真の意味で阪神大震災の教訓を残すことにつながる。本特集がその契機となることを願っている。

(震災・まちのアーカイブ会員)

【特集・メモリアルセンターと公論】

声・メモリアルセンターに望むこと

メモリアルセンターはどのような場であるべきなのか。震災に関しては、様々な領域で、学問分野で、多様な営為が積み重ねられてきている。今回は、図書館、史料保存、防災、文化支援の側面で震災に取り組んでこられた方々からご意見を寄せていただいた。(見出しは編集部による)

資料の活用が新たな災害研究を生む

稲葉　洋子

メモリアルセンターの計画案では、その機能として展示だけではなく、一次資料の収集や図書の閲覧などかなり大きな構想が提示されている。資料を展示するためには、その前提作業として受け入れ、内容の検討、処理、データ入力などの工程が必要である。これには膨大な手間がかかるため、そのためのスタッフや作業スペースを十分に確保しておく必要がある。もちろん、これはライブラリーや展示についても同様である。

また資料は死蔵していては意味がないし、提供した人の意志も生きない。さらに資料を研究者だけでなく、一般市民が利用できるようにすることも必要である。それゆえ研究者をサポートすると同時に、一般市民に対しても資料へのアクセスを確保する役割のスタッフが必要である。資料を広く利用に供することこそが、新しい災害研究を生み出すことにつながると考えられる。

一つの災害がこれだけ多くの資料を生み出したこと、そしてそれを役立たせていく施設を作ろうという構想が持ち上がっていることは歴史上例のない試みである。その意義は大きく、ここから新しい学問ができてゆくことへの期待は大きい。現在の構想がうまく機能すれば、震災が生み出した新たな災害研究の拠点として画期的なものになるだろう。それゆえセンターの運営に関しては、広い視野をもったスタッフが是非とも必要である。(談)

(神戸大学附属図書館 震災文庫)

「官立スタイル」を超えて

辻川　敦

震災の経験と教訓は、20世紀の開発型・行政依存型日本社会の問題点をさらけ出した。震災メモリアル・センターは、何よりも震災の経験と教訓に学んだものでなければならず、20世紀型の箱ものであってはならないだろう。

すなわち、高度成長～バブル期に典型的に見られるような、行政が造る巨大施設に専門家が描く像を展示し、市民は一方的にそれを展観して学べばよいという日本特有の官立博物館スタイルではなく、市民自身が専門家とともに館の運営や調査研究に参加する、欧米型・NPO型施設が望ましい。そこにおいては、現在阪神・淡路大震災記念協会が収集しているさまざまな震災資料・文献が、ライブラリー、アーカイブとして市民自身にも自由に閲覧利用され、そこで培われる幅広い調査・研究が展示や講座、出版その他の形で情報発信され社会に還元されていくこと、そのための施設機能や専門スタッフの整備も必要である。

現在公表されているメモリアル・センター構想からは、こういった方向性がかならずしも読みとれず、20世紀型・日本特有の官立スタイル、震災の経

験と教訓を広く市民に伝えていくことには無力な施設になることを危惧する。震災を記録する施設が、震災の経験と教訓から最も遠いスタイルの施設となるのであれば、これほど皮肉なことはないだろう。

(尼崎市立地域研究史料館)

市民の力で展示を充実させる

室崎　益輝

メモリアルセンターの展示についてはまだ検討中で、確定的なことはいえない。ここでは、私個人の意見もしくは期待をのべることにしたい。

メモリアルセンターの展示で、私が一番期待しているのは市民の力でその内容の充実をはかっていくということである。その鍵となるのが運営である。私は、その運営については３重の同心円をイメージしている。中核の企画は専任スタッフが担う。当然ここには司書的役割の職員のサポートが必要になる。その周りに 一般の人で企画・運営に関心を持つ人に参加してもらう。さらにその外から「友の会」的な組織が支える。運営には市民の力を借りなくてはならないが、その際企画を半年任せる位の思い切った措置が必要であろう。

当然ながら、資料に関しては、集まった資料を永遠に責任を持って活用してゆく体制が必要である。また、展示に関してはイベント的、テーマパーク的になることを避ける必要がある。展示に関してははじめに全て決めてしまうのではなく、運営のなかで柔軟に対応できるようにしたい。

震災は、社会科学と自然科学の区分を超えて、新たな研究が生まれる可能性を秘めている。そこでは自分の論文業績を気にするのではなく、社会にどう役に立つのか考える姿勢が求められる。メモリアルセンターはそのような新しい研究者を育む場であることも必要だと考える。(談)

(神戸大学都市安全研究センター教授、阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)展示・交流検討委員会委員)

高い理想を掲げよ

島田　誠

展示・交流検討委員を引き受けたものの、「なぜメモリアルセンターか」というコンセプトから詰めてゆくのではなく、すでに建築計画は決定した状態であった。予算執行の都合があるにせよ、ハードの大枠が決定した上でソフトの部分での発言に限定されている感がある。

映像シアター、時系列的な展示については、一種のテーマパーク的なものであり、それはそれで仕方がないかとも思う。現状では「情報カーゴ」の部分が本質的な展示になると考えているが、具体的にどうなるのかまだ未知数である。

アーカイブの公開提言にある、アーキビスト、学芸員などが必要との提案に同感である。私も委員就任にあたって専門職としての学芸員が必要であることを強調した。また、その上で市民のニーズを掘り起こし、マネージメントする専門職も必要である。

メモリアルセンターは単なるシンボル、象徴に終わらせてはいけない。パリ・ポンピドーセンターのフルステン館長が「階級も、人種も、年齢もなく、誰ひとり拒否されない空間」を提唱している。そこに行けば、震災直後に感じた、自然に対するおごりや経済中心の考え方への反省、人と人のつながりの大切さなどがよみがえる場であってほしい。

ただ、総じて理想の掲げ方が低い。次の新たな市民社会を実現するための実験場として、従来のシステムを逸脱することを認め、異質なものを取り込んでゆく度量が必要である。高い理想を掲げ、行動できる人材が必要だと考えている。(談)

(㈱海文堂書店社長、アート・エイド・神戸事務局長、阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)展示・交流検討委員会委員)

【特集・メモリアルセンターと公論】

「記録」と「記憶」の前提条件

笠原　一人

兵庫県による「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」の設置構想とその展示に関するアイデアの募集は、県の震災に対する取り組みの真摯な姿勢とそれが人々にも開かれたものであることを示しているかに思える。だがその実態は大きく異なっており、さらに事態は知らぬ間に、しかもあまりにも性急に進行している。去る7月に寺田匡宏氏と筆者が行った県の担当者への取材では、このような印象を拭うことができなかった。

筆者がこの構想について知ったのは、今年の春頃、新聞紙上においてだったように思う。しかし、取材時にはメモリアルセンターの建築物の設計者（昭和設計）はすでに選定されており、実施設計段階に入っているとのことであった。そして展示のアイデア募集も7月末で締め切られた。構想が広く一般に知らされてからわずか数ヶ月でほとんどすべてのことが決定されてしまった、といってよい。未曾有の震災をいかに記録し記憶し記念するかという課題の重要性や60億円という事業の規模からすると、あまりにも準備期間が短すぎる。県の説明では、今回は単年度予算の枠内での事業であり、急がざるを得なかったのだという。しかし、もっと十分な時間をかける必要があったはずだ。

震災の記録資料は散逸したり失われたりする前に集める必要があるだろうし、それを一挙に、大量に、そして一ヶ所に集めることは、「記録」の側面に限って言えば、評価されるべき部分もある。しかし一方の「記憶」は、量ではなくて質に関わるものである。それは時間の中で失われてしまうものではなく、むしろ様々な時間の層が重なり合うときに顕在化されるものであろう。人々による「記憶」の共有、あるいは分有も、一挙に為されるのではなく、長い時間の積み重ねの中で為されるはずである。しかも本来は、「記録」と「記憶」は不可分である。どのような「記録」にも人々の潜在的な「記憶」が横たわっており、「記録」によって「記憶」は喚起される。あるいは、「記録」は「記憶」の表象であると理解することもできる。現実には、両者を分け隔てることは難しい。にもかかわらず「記録」のみを急ぎすぎることは、両者を引き剥がすことにもなりかねない。十分な時間を必要とする所以である。

ただし、時間だけをかければ済むものでもない。こうした質に関わる難しい問題を、人々を巻き込む形で組織的なプログラムに乗せていくための手間も必要となる。

今回のメモリアルセンターの建築物は、「プロポーザル方式」で設計者が決定された。この方式は、公共建築物の設計者選定方式の一つであり、「設計入札方式」に代わり、時間や費用、手間をかけることのない合理的な、しかも透明性の高い選定方式として評価され、近年頻繁に公共事業に用いられているものである。しかしその実態は、多くのことが不透明なまま、ただ合理性において用いられているに過ぎない。さらにこの方式では、建築の表現が選ばれるのではなく、設計者が選ばれる。つまり建築の表現という質の問題については、審査されないことになる。

設計者の選定にしても、あらかじめ選定された数社（数名）の中からのものであるから、結果は知れている。このことは、今回も同様であった。

メモリアルセンターにとって、建築の表現の意味は大きい。地震という、偶然性や不条理性を孕む出来事とその「記憶」を、公共性の高い建築を通じていかに記念し、表現するか。それは、人類にとっても大きな課題である。このような課題に真摯に答えるなら、建築物の選定は「公開コンペ」方式にすべきである。この方式なら、設計者ではなく表現を含めた建築物の設計を選定できることになる。設計案を広く内外から募集し、審査過程を公開することもできる。審査員の権限も増し、責任も明らかになる。多くの面で開かれたものとなるはずである。また、「記録」や「記憶」とその表現に関する公開の議論の場を設ければ、人々の意識を高めることができるなど、建築以外の効果も大いに期待できる。人々を巻き込みながら、質をめぐる問題を組織的なプログラムに乗せることが可能になる。

メモリアルセンターは、短期間で一挙に構想するのではなく、こうした建築物の選定方法も考慮しつつ、まずは「準備室」を設置することから始めるべきだった。センター設立までに、丁寧な「記録」の収集や「記憶」に関する勉強会、建築物や展示のあり方、その選定方法についての議論が必要である。記録資料も、1ヶ所に集中させる必要はない。「記録」や「記憶」は場所性とも不可分である。データはコンピュータで一挙に管理して、資料そのものは、場所に場所に根ざした複数の小さな資料館を、使える範囲の費用で少しずつ設置して、そこで保管・展示すればよい。方法はいくらでもある。

とにかく、十分な時間と戦略的なプログラムなどの手間は前提にされなくてはならない。さもなければ、震災の「記録」や「記憶」を扱う資格はない。多額の費用を投資して一挙にメモリアルセンターをつくることは、優れたことのように思えるのだが、実は、その弊害の方が大きいような気がしてならない。

（京都工芸繊維大学助手、建築史・都市史）

横浜震災記念館—1924年—　阿部　安成

横浜にも大地震の翌1924年9月1日に開館した震災記念館があった。今はないその展示を『横浜震災記念館記念帖』にみると、掉尾に「焼野原と復興第一年」の対照がわかる写真がある。

memorialとは記念であり追悼であり、ひと（びと）の記憶の所在を指す。そこは復興を確認し死者を悼み、今後も日々を生きる生還者の場所である。

『横浜震災記念館概要』(1935年改訂)の冒頭にある該館の「由来と其使命」は、大震災という「禍難」を「困苦、努力、質素、倹約、同情、感謝」をめぐる「此経験此活教訓は実に貴重」だったと回顧し、同時に展示を通して「発奮努力の精神を鼓舞し愛市涵養に資することを期」すと示した。家を支え町を興す1人ひとりの倹約や感謝が市の復興にも繋がると示されればそれは発奮努力を増幅させる装置となるだろうし、一方で愛市の観念は必ず市民と非市民を峻別すると自覚せねばならない。

記念も記憶も誰にとっての復興かを常に問うている。

（歴史学専攻）

【特集・メモリアルセンターと公論】

亡くなった者、壊れたものへの責任

季村　敏夫

亡くなった者、壊れたものへの責任という視点が、被災地の初心である。

責任は、非命の者への追悼、破壊されたものへの哀悼から生まれる。死者に対する生者の呼びかけであり、無念の思いへの応答である。死者との対話は生者の倫理である。モラルハザード、他者との共生を標榜する現在、この視点の確立は不可避である。

「誰が、なにが、なぜゆえに、どのような状況で、壊れたのか、復興したのか」。

建築物「メモリアルセンター」を満たすコンセプトは、この問いに答え得る思想のボディを持たねばならない。その空間は、一人ひとりの、一つひとつの、世界からの消滅理由を、徹底した事実に基づき、丹念に記憶できうる学際的な装置であって欲しい。

誰が、とは今まで生者だった突然の死者。なにが、とは全半壊した建築物、構造物、景観等を含めた被災したすべての物である。具体的には、ほんの数秒でなぜゆえ六千有余名の命がうしなわれたのか。命の器としての風景が壊れたのかという直後の問題。そしてその後の死者及び、時間の経過により浮上した社会問題が、センターを訪れると即座に検証でき、検証の契機を与えられ、しかも思考と自省を促され、かつ追体験できうる公共の場であることが望ましい。

地震は自然災害である。センターのコンセプトは、加害責任の明らかな原爆、水俣、ホロコースト記念館（現在のアメリカ、ドイツの記念館のコンセプトはそれぞれ異質なものであることは知っておく必要がある）とは明瞭に区別されねばならない。私たちは何に対して責任があるのか。そもそも責任とは何なのか。そのことを市民レベルで問い続け、答え続ける場こそ「メモリアルセンター」であろう。苦しかったが、それなりに元に戻れたので、責任といわれてもわかりづらい。これからは静かに暮らしたいという生き方も承認した上で。

地震直後の生命の問題は、野田正彰氏、西区の医師額田勲氏によりいち早く指摘された。とりわけ額田氏らは一様に「圧死」と括られた判定に疑義を投げかけ、死の個別理由を自分の足でたどった精緻な検証を残した。壊れた「もの」は、宝塚市の建築家宮本佳明氏、東京の建築家磯崎新氏、写真家宮本隆司氏らにより風景論、廃墟論としてとらえられ、ヴェネチア・ビエンナーレで実践された。記憶の装置を考える時、彼らの思想ははずせない。（筆者も係わった『生者と死者のほとり、阪神大震災・記憶のための試み』1997年、人文書院刊にそのことに関する論稿があるので参照されたい）

二番目のその後の死者とは孤独死の問題である。現在なお災害復興住宅の内部で起こっている孤独死は何を物語っているのか。真摯な医師（大阪在住のある医師は、下中島公園でテント暮らしを余儀なくされた人びとを無償で休日診療し臨床記録をとり続けた）、主婦、夜間高校教師（東灘区のボランティアグループが所持するノート数冊は、五十年後必ずや第一級史料になること疑いない。社会の見えにくい場所で、なす術もなく自己崩壊をたどる人びとの実態が事実に即し克明に記録されている。）らによる地道な活動記録の、保存、将来の公開は欠かせないものと思われる。

最後に、地震をきっかけに生じた防災、地域コミュニティ、老人、ボランティアなどの社会の問題に関する資料は、ネットワークを活用し、現時点で集められるだけ集め、次世代へ引き継がねばならない。とりわけ公費解体制度の検証は欠かせないものである。今なお係争中のマンション立て替え補修問題は極めて重要である。なぜゆえ住民の不幸な対立が続くのか。他の地域に二度と悲劇を繰り返さぬため、法廷闘争に持ち込まれる前の記録の収集、保存、公開は不可欠である。

以上、筆者の関心事に即し、問題提議をさせて頂いた。仄聞によると、「メモリアルセンター」は仮称で、追悼より防災に重点を置く姿勢があるらしいが、すべての議論は公開すべきである。

(震災・まちのアーカイブ会員)

何を感じ、何を学び、何を伝えるのか

市村　登和

私たちは、事前に何も知らされずに、突然にあの地震を体験しました。この体験を後世に伝えていくために、今生きている私たちは、何ができるのでしょうか。

この答えを、今回の地震のために作られた、あるいは使われた資料を整理している私たちの目線から考えたとき、大切なことは、「効果的な演出」ではなく、「何を私たちは感じ、伝えたいのか」を、はっきりと示していくことだと思います。つまり、残された資料に何が見えるのか、何を学ぶのか、資料はなぜ作られたのか、どうして資料は残されているのかなど、メモリアルセンターを訪れる人々が、それぞれの視点から、感じたり、考えられる場所が必要だと思います。この役割をメモリアルセンターが担っていくことを私たちは、期待します。

私たちが体験したことを、ありのままに示す。それに、特別な演出は必要なのでしょうか。体験した事実を真正面から受け止め、そして伝えていこうとする姿を誠実に表すことが大事なことだと思います。

(震災・まちのアーカイブ会員)

＊

阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)に望むこと

木内　寛子

ありのままを伝えることはできない。ありのままを再現することはできない。とすれば作品にならざるを得ず、何を、という独自の目が必要となる。だが一方、多くの人たちに、未来に、開かれた施設であると考えたとき、その人が何を望むか、何を必要とするか(例えば、具体的な百人の人を思い浮かべてみればよい)を決めてしまうことはできない。書かれない物事があることも、考えに含めてほしい。また一口に復旧復興といっても、その裏には捨ててきたものがある。いくつもの相を合わせることを、展示に際しても考えてほしい。また、作品ということを考えれば、芸術作品も展示の考慮に入れてもよいのではないかと思う。　(震災・まちのアーカイブ会員)

＊

集めること、集め続けることを伝えること

季村　範江

メモリアルセンターの役割は、震災の記憶をいかにとどめるのかということに尽きている。記憶を伝えるためには、「もの」を媒介しなくてはならない。そのひとつが資料である。五年半、資料収集の活動に携わってきた立場から、意見を述べさせていただきたい。

あれほどたくさんの人々が、何ゆえ死者になったのか。そのことを検証できる場所であって欲しい。それが第一である。

その上で重要なのは、被災地で起きた出来事を出来るだけ多く記録に残すということである。ここで起きた問題は、日本のみならず21世紀が抱え込んでしまった同時代共通の課題でもあり、私たちがこれから長い時間をかけて、検証し解決の道を探っていくことは、歴史的にも大きな意義のあることだ。人々が、天災をどう受けとめたのか。何を思い、何を感じたのか。何に耐え、何をきり棄ててきたのか。どのように乗り越えてきたか。また乗り越えられなかったのか。震災の記憶をいかにとどめるのか。そのために人々が蒙ったすべてを、さまざまな立場から記録した資料を集めること。集め続けることを伝え続けることが必要である。

(震災・まちのアーカイブ会員)

【特集・メモリアルセンターと公論】

阪神・淡路大震災メモリアルセンター展示計画に関する公開提言

震災・まちのアーカイブ

兵庫県は、メモリアルセンターの展示を構想するにあたり、県民による展示計画の案を募集しました。私たち震災・まちのアーカイブは、5年半、震災の資料の保存に活動に取り組んできた経験を伝えるため、この展示計画募集に公開提言の形で応募しました。

提言の中では、震災を記憶するとはどういうことか、活動の中から学んだことを述べました。また、展示に際してはあらゆる分野の専門家の英知を結集することが必要であることを述べました。展示業者ではなく、専門家が展示に責任を担う必要を強調したものです。さらに、その展示を担う専門職として、アーキビスト、ライブラリアン、学芸員の必要を述べました。なお、本「公開提言」は2000年7月31日、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部総括部復興企画課メモリアルセンター整備室に提出し、受理されました。

はじめに

阪神・淡路大震災発生から5年半の歳月が経過しました。

震災から5年という一つの節目が過ぎ、現在、国と県によって阪神・淡路大震災メモリアルセンターの整備計画が進められています。

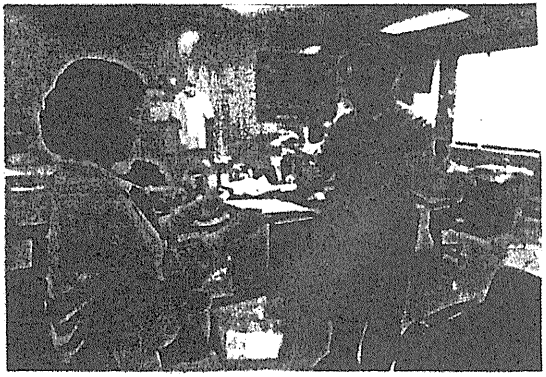
震災は私たちに様々な問いを投げかけましたが、社会の中で様々な記録活動が試みられたという点でも特筆される出来事でした。地震直後から多くの手記が発表されたことをはじめとして、活字、映像、芸術など多岐にわたる記録活動が取り組まれています。私たち震災・まちのアーカイブも、1995年3月に震災・活動記録室として発足して以来、5年半の間、神戸長田の地を拠点として震災の記録・資料の保存活動に取り組むNPOとして活動してきました。

被災地で震災の記録の保存に携わる私たちは、今回のメモリアルセンターの計画に私たちのささやかな経験が何らかの役に立つのではないかと考えました。そこで私たちは、5年半の経験をもとに、メモリアルセンターの展示に関する提言を行いたいと思います。

1　震災を記憶することとは何か

震災メモリアルセンターは、震災の資料を保存し後世に記憶を残すことを目標とする施設です。

では震災の資料を保存し記憶するとは一体ど



公開提言の提出（右・細見秀和メモリアルセンター整備室主任、左・季村範江アーカイブ代表）、2000年7月31日、兵庫県庁

ういうことなのでしょうか。まず、私たちの経験からこのことを考えてみたいと思います。

私たちが5年半取り組んできたのがまさに震災の資料を保存する活動でした。震災に際しては、様々な資料が膨大に作成されました。それを後世に伝えるにはどうすればよいのか。模索を続けた5年半だったと思います。

その際、私たちが直面したのは、伝えることの困難さという問題でした。資料の重要性を関心のない人にどのようにわかってもらうか。震災の体験を直接揺れを経験していない人にどのように伝えるか。活動を続ける中でこの問題が私たちの前に浮かび上がってきたのです。

私たちはその問いに答えるには、単に資料の保存を行うだけでは不十分だと考えました。これは震災をどう記憶するかという問題である。だとすれば、それを多くの人に伝えるためには普遍化する必要がある。この思いから資料保存という実務的な活動を行う一方、『記録室通信』『記録室叢書』『瓦版なまず』『なまずブックレット』『阪神大震災 様々な声の栞』などの通信紙や書籍を発行し、研究会や講演会を開催することを通じ、いわば震災を文化の領域で普遍化しようと試みたのです。

そして気付いたのは、私たちが直面しているのは阪神大震災だけの問題ではないということでした。私たちは、『記録室叢書』刊行のため水俣に、『苦海浄土』の著者石牟礼道子さんを訪ねました。そこでは水俣の人々の苦難と阪神大震災の体験がつながることを示唆されました。また阪神大震災で娘さんを亡くされた家族の聞き取りを著書『百合』にまとめた河村直哉さんをお招きした読書会では、阪神大震災の死者に思いを寄せることは、いわれなく死を余儀なくされた全ての死者に通じる道だということを教えられました。

今世界では、記憶の問題が様々な形で問われています。阪神大震災が起こった年はくしくも戦後50年にあたり、ホロコースト(ショアー)や「従軍慰安婦」問題、広島、水俣で起こったことをどう記憶するのかという問題が一挙にあらわれた年でした。

震災は神戸という限られた土地で起きた出来事です。しかしそれは決して一地方の出来事にとどまるものではありません。私たちは、阪神大震災という体験を通じて、記憶という、同時代の、全世界の、普遍的な課題と向き合っているのだと考えます。

2 どのような展示が必要か

では、具体的に、どのような展示が必要なのでしょうか。

必要なのは、人がどのように行動したのか、事実をありのままに伝える展示だと考えます。アクセス可能な全ての一次資料に基づき、微細な事実もおろそかにすることなく、震災の全体像を明らかにする。そのことを真摯に行えば、見る者に震災の教訓は必ず伝わるはずです。

そしてその事実をあらゆる英知を集めて展示という形で表現する。私たちは5年半の活動の中で、様々な分野の専門家をお招きしてご意見を伺いました。精神医学、文学、宗教学、法学、社会学、まちづくり、都市工学、防災、図書館学、歴史学、民俗学、建築学、史料保存、演劇、現代詩、写真、ジャーナリズム……。震災には様々な分野の専門家が関わっています。震災の記憶を残すという営為は様々な専門分野の共同によってこそはじめて可能だと考えます。

展示とは表現行為です。そこではそれを生み出した社会の質が問われます。震災と表現に関わるあらゆる専門家の英知を結集した展示を行うことが必要だと考えます。

そしてその上で、展示は開かれた展示であること。

開かれているとは、一つには見る者に開かれていること、もう一つには同時代に開かれていることです。見るものに開かれているためには、観覧者がさらに調査研究を行いたいと考えたとき、それを保証する手段があることが必要です。レファレンスや原資料へのアクセスをいかに容

易にするかが問題となるでしょう。また、同時代に開かれていることとは、日々刻々進化する震災研究と社会が求める震災展示へのニーズに速やかに対応できることが必要だと考えます。そのためには、巨大な設備ではなく小回りのきく展示が必要となるでしょう。これらの課題をクリアし、展示を開かれた展示とすることが必要だと考えます。

3　開かれた展示、開かれたメモリアルセンターのために

私たちが5年半の活動を通じて心がけてきたことは、資料を可能な限り開かれた状態におくこと、活動を開かれたものとすることでした。

資料は死蔵されては意味がありません。資料の情報を発信することが資料を生かすことだと気付き、通信紙で資料の情報を公開することにつとめ、震災資料の保存に関わる人やグループ、公的機関との連携を積極的に行いました。

資料は研究者や市民が使ってこそ生き、寄贈して下さった方の意志が尊重されることになります。展示や資料、さらにメモリアルセンターの運営に関するあらゆる情報を公開し、発信し、広く社会に開かれたものとすることが必要だと考えます。

現在、メモリアルセンターの構想では、研究機能、資料の収集保存機能、図書の収集公開機能、展示機能が提示されています。しかし資料や図書はそのままでは十分真価を発揮しません。その価値を読みとり社会とつなぐ専門家を置くことを提言します。

①アーキビスト

アーキビストとは一次資料の取り扱いに関する専門家です。

震災に関する一次資料は膨大に存在し、その整理調査法は手探りの状況です。また資料に関しては、受け入れ、分類、整理、補修、保存など固有の取り扱いが必要です。さらに資料を寄贈してくれる人はアーキビストとの人的な信頼関係のもとでこそ大切な資料を寄贈しようという決断を行います。

資料の収集と保存に責任を持つアーキビストが必要だと考えます。

②ライブラリアン（司書）

ライブラリアンは文献資料の取り扱いに関する専門家です。

膨大な量の文献を収集し管理すること、研究者や一般利用者のレファレンスに応えること。このいずれもが、資料を社会に開かれたものとするために必須の条件です。

文献資料の専門家であるライブラリアンが必要だと考えます。

③学芸員

学芸員は展示に関する専門家です。

現在の研究水準はどの程度で、そこでは何が問題となっているのか、その課題は何か、これらを展示という形で表現することは困難な課題です。そのための専門職である学芸員を置くことを提言します。

おわりに

阪神・淡路大震災は、歴史に残る出来事です(すでに高校の歴史の教科書には、「1995年1月17日、阪神・淡路大震災起こる」と記述されています)。

60億円を投じて建設されるメモリアルセンターも、今生きている私たちの生命を超えて後世に残る施設です。

一体私たちは、阪神・淡路大震災を50年後の人々にどう伝えるのか。100年後の人々にどう伝えるのか。

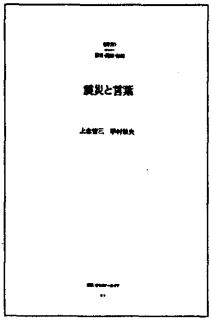
可能な限りの想像力と知恵を出し合ってこの施設を造り上げることが、今私たちに求められているのだと考えます。

2000年7月31日

震災・まちのアーカイブ

《叢書》
震災・記憶・記録
発刊

阪神大震災から5年半。震災は私たちに記録・記憶とは何かを問い、様々な営為が生まれて来ました。
同時代が抱える記録の問題、記憶の問題に私たちは神戸の地から答えてゆこうと思います。



『百合』との往還

震災の死者と普遍的な死者。
1冊の本を巡る対話の記録。
大門正克、藤原直子、蘇理剛志、季村範江、
市村登和、菅祥明、山本唯人、寺田匡宏、
季村敏夫、河村直哉

震災と言葉

震災はどのように表現されてきたのか。
現代演劇、現代詩の現場からたどる。

上念省三　季村敏夫

いずれも　A5変形版　『百合』80ページ、『言葉』82ページ　定価各400円
○震災・まちのアーカイブで販売中○購入希望の方は電話か、振り込みで○電話は078-781-8891季村範江まで（夜間）○振り込みは送料（1冊180円，2冊240円）と代金を振り込んで下さい○振込先：郵便振替 00920-2-125759　震災・まちのアーカイブ

資料閲覧のご案内

震災・まちのアーカイブでは震災の記憶をひとりが振り返るための資料を収集・保存しております。

震災発生直後からのボランティア団体の一次資料（260団体）やミニコミ、震災関連の図書、ビデオ、新聞切り抜き、インタビューテープなどをご利用いただけます。

開室日　第1・3木曜　第2・4土曜　10～17時
事前にお電話を下ればさいわいです。

会員を募集しています

震災・まちのアーカイブでは会員を募集しています。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、是非ご参加下さい。

賛助会員も募集しております。賛助会員には『瓦版なまず』（季刊予定）『なまずブックレット』『《叢書》震災・記憶・記録』、研究会のご案内をお届けします。

年会費は一口1000円。振り込みは、郵便振替 00920-2-125759　震災・まちのアーカイブまでお願いします。

【編集後記】『瓦版なまず』8号をお送りします。前号からかなり時間があいてしまいましたが、今回は、メモリアルセンターへの提言特集です。また、上記広告のように「《叢書》震災・記憶・記録」を発行いたしました。盛りだくさんな内容となっています。これを期に新規蒔き直しで新たなステップを踏み出したいと存じます。(T)

瓦版なまず 号外

瓦版なまずkawaraban namazu 号外　2000年9月30日発行
編集人：寺田国宏　発行人：季村範江
震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4　神港金属㈱内
Tel:078-681-6231 Fax:078-681-6232 e-mail:kioku@kh.rim.or.jp

2000年(平成12年)9月20日　水曜日　神戸新聞

県が計画中の震災メモリアルセンター

「関心高めもっと論議を」

神戸のボランティア団体呼びかけ

被災の教訓伝える重要な場
現状に一石投じたい

二〇〇二年春オープンを目指す「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」（仮称）について、神戸市内のボランティア団体が、多くの人に関心を持ってもらおうと、機関誌などで呼びかけている。震災の教訓を世界に発信する県の施設。メンバーは「震災をどう伝えるかは、体験した人すべてにかかわる重要な問題」センターを県の担当者や専門家だけに任せず、どんな展示が必要か、どう実現するかなどもっと議論を」と訴えている。

（西　栄一）＝3面に関連記事＝

「メモリアルセンターにもっと関心を」と呼びかける震災・まちのアーカイブのメンバー＝神戸市長田区東尻池

震災関連の資料を調査・整理している「震災・まちのアーカイブ」（季村範江代表）。

同センターは、同市中央区の神戸市部新都心に建設され、震災資料の収集・展示や災害対策の人材育成、調査研究を行う。年内に着工予定。

アーカイブのメンバーは「市民の関心が高まらないまま建設されれば、センターが震災の経験と教訓から遠ざかる施設になる」と指摘する。

機関誌「贈（かわら）版なまず」の特集で、県に対し「計画を急ぎ過ぎることなく、多くの市民、専門家を巻き込む手間と工夫を」と訴えるとともに、市民に「センターについてもっと議論を」と呼びかけた。

県は、ソフト面の充実を図るため、五月、学識者による展示・交流検討委員会（二十八人）を結成、七月、展示物の内容や展示方法について、県民の意見を取り入れようと、郵送やインターネットで提案を募った。だが、キャンペーンはあまり浸透せず、提言は十七人・団体、三十八件にとどまった。

アーカイブ事務局の寺田国宏さんは「震災に関してきちんと研究や議論をしない姿勢が生まれたが、その要因を十分に取り入れた議論、メモリアルセンターについて、重要なことが議論されないまま計画が進む現状に一石を投じたい」という。

「市民なまず」は、神戸・三宮のフェニックスプラザで自由にもらえる。無料。

震災の記憶の展示方法

被災者の声こそ方向決める

兵庫県が神戸市中央区の海岸沿いに建設を予定している「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」（仮称）の骨子が近づいているが、その展示内容がどんなものになるのか気になる。

建設約六十億円。延べ床面積約八千平方メートル。十二月末に骨子が、一般から募った。ボランティアの団体などが集った手書きのチラシ、ノート、ポスター、日記類、写真など、なまの一次資料の展示と利用の仕方が、県のメモリアルセンター整理委員会（八人）で、時人や研究者などの意見を聞く。

二〇〇一年度に完成の見込み。注目されるのが、震災直後に個人や団体から三十八件が寄せられた。「被災した家から取り出したスプーンと兵庫県」といった他の展示や、「震災時に使用する持ち運びが簡単な救急セット」などのアイデア（震災体験の語り部ボランティアを）などだった。

「一次資料を扱う専門家（アーキビスト）を置いてほしい」と訴えたのが、市民団体「震災・まちのアーカイブ」（代表・季村範江さん）だ。時人や研究者などでは、補助的のものだが、十七の個人や団体から三十八件が寄せられた。「被災した家から取り出したスプーンと兵庫県」といった他の展示や、「震災時に使用する持ち運びが簡単な救急セット」などのアイデア（震災体験の語り部ボランティアを）などだった。

「一次資料を扱う専門家（アーキビスト）を置いてほしい」と訴えたのが、市民団体「震災・まちのアーカイブ」（代表・季村範江さん）だ。時人や研究者などの視点から、図書館司書、小説家などの視点、図書館司書、学芸員などの視点、展示の専門家、配置、などを提案している。専門家が内容を深めることで公開し、つつも市民が研究や研究者が利用できる体制を造ることの必要性を訴えている。

整理委は、どうした提案については、始めの神戸市長田区を中心に住宅や仮設住宅、避難所などに配られた資料の収集と調査活動を続けてきた。

「五十年後、百年後の人々に震災をどう伝えるか」の視点から、学識経験者らで構成する「展示・交流検討委員会」を八月末に開いて論議してもらった。その結果、全体として提案を展示に反映させる方向が確認された。また、展示資料と来館者・研究者を結ぶ投資と市内職員については「広く人材を募って配置することで利用価値を高めたい」としている。

「震災・まちのアーカイブ」は、センター完成後の運営を考え、どのような展示が行われていくのか注目していく、という。

十月十五日にはシンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」（主催・神戸大学震災資料センター）が神戸・三宮のフェニックスプラザ自治ホールであり、市民の関心から、展示・保存のあり方を話し合う。

建物部分の工事が始まったとしても、具体的な展示方法や保存資料の利用の仕方などは、これからも問に合うはず。震災の教訓をどう生かすか。その方向は、当事者である被災者の論議の中から生まれるのではないだろうか。（井）

朝日新聞
2000年(平成12年)9月30日　土曜日

県民からアイデア38件

大震災メモリアルセンター

検討委が展示設計に反映

二〇〇二年度にオープン予定の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」の展示内容などについて、兵庫県は県民から寄せられたアイデア全三八件を検討、学識者で組織する展示・交流検討委員会などで提案の趣旨や実現性などを検討、近く仕上げる展示設計に反映させる。

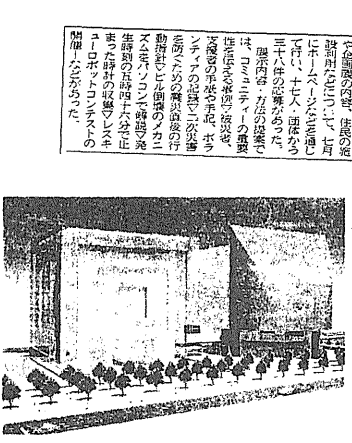
アイデア募集は、展示物や全国調査の内容、住民の巡回型市民センターなどについて、七月にホームページなどを通じて行い、十七人、団体から三十八件の応募があった。

展示内容、方法の提案では、「コミュニティーの重要性を伝える」「被災者、犠牲者の手紙や手記、ボランティアの記録」「次に災害を防ぐための震災後の行動指針」「ビル倒壊のメカニズム」「パソコンで時刻プ発生時刻の五時四十六分」「正確な時計の収集」「ブレスキューロボットコンテストの開催」などがあった。

開放スペースの活用法や住民参加の仕組みについてはメモリアルセンターの研究成果の発表▽わが家の防災対策の紹介▽地震所や仮設住宅で知り合った人々が交流する拠点などが挙がった。

▽デオロテープの紹介▽語りベボランティアの活用▽などが挙がった。

▽被災者が体験談を語ること　その他に、「展示案者だけでなく、市民や専門家、働く必要がある」「年に一がかかわり、開かれた展示とするべき。展示はセンターを拠点に動き展開する」などが提案分析し、解説する学芸員を二人置く。



阪神・淡路大震災メモリアルセンターの完成イメージ図

神戸新聞　2000年（平成12年）9月21日　木曜日

展示、研究に重点

兵庫県ヘルスケアパーク見直し

震災メモリアルセンターに併設　建設費6分の1

国内では最大級の展示テーマパーク「ヘルスケアパーク」の見直し作業を進めてきた兵庫県は十九日、展示の研究部門に特化させ、阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）の二期事業として施設する方針を明らかにした。

同パークは阪神大震災を教訓に、県が生命の尊さを感じながら学ぶ場として、社会、自然、産業、映像のテーマパークとショッピング施設などを予定していたが、その後、神戸市都市部に震災の教訓を発信するメモリアルセンターを建設することなどから、当初に比べ規模で六分の一となり、内容ともに大幅に変更されることになった。

同パークは阪神大震災を教訓に、県が生命の尊さを感じさせる施設として、相互に補完するよう二期事業として計画を修正した。

二期事業は、地上八階地下一階、延べ床面積一万二百平方メートルの建物をメモリアルセンターの隣に建設し、地下で結ぶ。アミューズメント部分は取りやめ、「癒」をイメージした展示のほか、「ヒューマンケア研究機構（仮称）」を設け、医療や文化など幅広い分野からヒューマンケアを研究する。施設内には音楽療法館などを開く。健康福祉コミュニティーカレッジや、国連地域開発センター（仮称）、計画開発事務所などの防災関係機関も入る。

オープンは、メモリアルセンター竣工半年後れの二〇〇二年度中ごろの予定。総事業費は六十一億円で、すべて県が負担する。このうち、メモリアルセンターは当初の額の百二十億円の規模となる。

クイックシンキング

神戸新聞（夕刊）　2000年（平成12年）9月19日　火曜日

2001-winter

9

瓦版なまず

kawaraban namazu

瓦版なまず
2000年2月11日発行
編集人：寺田匡宏
発行人：季村範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022神戸市長田区東尻池町1-11-4　神港金属㈱内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 e-mail;kioku@kh.rim.or.jp

【6年目の1月17日】

記憶は、いつも。

メモリアルウォークに参加して

上念 省三

ぼくが『阪神・淡路大震災6周年 1.17ひょうごメモリアルウォーク2001』に参加しようと思ったのは、震災の直後に魚崎から元町まで歩いたことがあって、それを追体験してみようと思ったからだ。思い返せば、その時は「元町あたりがずいぶん戻ってきたらしいから」という物見の心で行ったわけだが、今回だってさして変わりはない。10km歩くこと自体に興味があったし、県の公館で行われてきた式典が初めて市民参加の形式で行われるということにも興味があった。

芦屋の川西公園に定刻を少し遅れて入ると、もう1000人近い人でいっぱいで、用意しているはずの参加パスポートなども既になくなっていた。主催者側も、少々少なめに見積もっていたわけだ。確かに、平日、寒い、6年目という中途半端さ、大学生は試験前、と悪条件がそろっていた。それでも、公式発表にしたがえば1100人という芦屋からの参加者数は、ある意味では異様なほどに多かったというべきだろう。

はたして、自分たちも含め、道中は折からの寒風にもかかわらず、なんだかのんびりしたものだったように思う。参加者のいでたちがいわゆ

メモリアルウォークのコース（芦屋～神戸市中央区HAT神戸、10km）

る被災者ルックだったのは、出かけるときに自分たちで可笑しがっていたので予想されたとはいえ、ある種の緊迫感を漂わせるのは、取材陣の多さと慌しさで、往時を偲ばせた最大のものはヘリコプターの爆音、これにはさすがにいやな思いがよみがえった。あとは交通整理等に当たってくださったボランティアの方のさわやかさで、これも往時の、たとえば代替バスや街角での炊き出しやら、いろいろなことが思い出された。

のんびりさを増幅させたのには、参加者の会話がほとんど過去形で語られているように聞こえたことが大きい。確かに、道中目に入る震災の爪痕といっても、更地がせいぜいで、更地ぐらいどの街でも見ることはできる。もちろん、とっくに、あの風景が更地になり、新築の住居になるだけの時間は、おおむね、過ぎているように見えていた。

妻が小声で「前のおじさん、数珠持ってるよ」と教えてくれたので、その人の手許に目をやった。他人が詮索する種類の物語ではないが、この歩みの一歩一歩がその人にとって、ぼくとは違う重みと痛みを持っているであろうことを、改めて気づいた。今日は多くの人にとって、ご命日に当たることを、忘れかけていた自分に、改めて気づいた。ひどい話だ。

12月末に見た、日本を代表するパフォーマンス・ユニットdumb typeの「メモランダム」という作品で印象的だったのは、女性3人、男性2人のダンサーが踊った美しいパートだった。男性が1人少ないという現われによって、ぼくたちは彼らが1人の重要なメンバーを失ったことを否応なく想起させられた。記憶は、いつも喪失をめぐっている。あの日に起きたことを記憶することよりも、あの日に失ったものを記憶し続けておくことのほうが、ぼくたちにとってはずっと大切だ。ゴール地点に建設されるメモリアルセンターと仮称されるその施設は、どのように喪失を抱え込むことができるのだろうか。ただ柔らかに、ともに踏みしめるための施設であってほしい。

(演劇・ダンス批評)

【6年目の1月17日】

6年目からの課題

佐々木　和子

1月17日は、メモリアルウォークの記念イベントに阪神大震災記念協会職員として参加した後、東遊園地の「1.17希望の灯り」を見に行った。

感じたのは多くの人が集まる場所を求めているのではないか、ということ。東遊園地には3時頃行ったが、「1.17希望の灯り」のロウソク点灯が始まる前だったにもかかわらずすごくたくさんの人が集まっていた。追悼という言う言葉でくくることができるかはわからないが、場所の意味を考えさせられた。

また、東遊園地にある神戸市設置の震災モニュメントで見た、娘さんの遺影(振り袖姿)を抱いた男性の姿が忘れられない。私自身、来年成人する娘がおり、モニュメントに刻まれた亡くなられた娘さんの名前をそっとなぞって帰って行かれた男性の気持ちを思った。先の戦災では空襲で亡くなった死者の名前すらわからないとよく言われる。なぜ名前が残されなくてはならないのか、人はなぜそのことにこだわるのか、その意味が少し分かったような気がする。

6年目というのは中途半端な時期だと思う。5年目までは、ある意味で、なぜ震災かということが問われることはなかった。また10年も経つと歴史になるという意味でひとつの区切りだろう。しかしその間の時期をどのように過ごして行くか。とくに記念協会での震災資料の収集、保存の仕事をどう展開して行くべきなのか考えたいと

思う。[談]

(阪神・淡路大震災記念協会職員)

記者として

西　栄一

今年の1月17日は、午前5時から神戸深江の慰霊式を取材した後、芦屋でメモリアルウォークのスタート地点を取材。その後、一旦会社で夕刊の署名記事をまとめた後(夕刊1面に掲載)、昼から三宮、兵庫、新長田などを経て、夜は御蔵小学校の灯りを取材し、再び会社に戻って記事を書く、という一日だった。

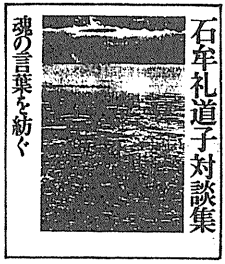
1月17日午前5時46分というのは厳しい記念日だ。やわな気持ちでは外に出られない日、時間だ。底冷えする屋外で、慰霊式に参加するというのは、「観光気分」では出来ない。それなのに、あれだけの人たちが参加しているというのはすごいことだ。「亡くなった家族・知人の当時の痛み・苦しさの何百分の一、何千分の一かでも感じたいから」と、痛いほどの寒気をじっと耐えひたすら祈っていた方もいる。気軽にのぞける時間ではない。だから、これからも純粋な空気は保たれるだろう。

長期取材を続けてきた深江では、6年目にして初めて慰霊祭に来た遺族に会い、何年経っても癒されない心を思った。長田では、震災で地域を離れた子どもたちが、「1・17」に合わせて、震災前まで住んでいた町、避難生活をしていた小学校に来ると言う場面に出会った。震災直後、支え会い助け合ったことを懐かしく感じている子どももいた。はしゃぎ回る姿は事情を聞いていないと単にうるさいだけだが、事情を聞いていると、何でもない会話でも感動的だった。また、夜の御蔵で見た灯火は、ペットボトルに蝋燭をともした一見ちゃちなものだが、遺族が集まり、体験した人が一体感を確認し合うことのできる美しい炎だった。

6年目の現場を歩いて特に感じた変化は、悼むための独自の場が出来つつあるのではないかと言うことである。それは行政の力を借りずに行われていることに大きな意味があり、むしろ行政や既存の団体に依存している行事は早晩しんどくなるだろう。皇族を呼んだりセレモニーを行ったりしなくてもよいから、「悲しみの場」のような空間があればよい。行政は、それらを財政的、制度的に側面からバックアップしてゆくことを考えるべきだと思う。

一方で「もう震災の話は終りにして」「行事がうるさい」という声も少なからずあった。平日のど真ん中ということもあり、5年目までのなにか胸がジンジンするような痛みや焦燥感、ある種のいたましい重さは感じられなかった。しかし、所々(特に朝の5時46分は)身が引き締まるようなスポットがあった。それらは真剣な市民たちの集まりで、本物が残ったという感じがする。震災を体験したものの端くれとして、鎮魂の祈りの場にいたことに満足している。[談]

(神戸新聞社会部記者)



石牟礼道子対談集

魂の言葉を紡ぐ

《記録室叢書》での
対談 季村敏夫・範江「死なんとぞ、遠い草の光に」(1996年)を収録

2000年12月刊　河出書房新社　3200円

【メモリアルセンター計画の現在】

前号の『瓦版なまず』では、「メモリアルセンターと公論」と題して、兵庫県が2002年春のオープンを目指して建築中の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)」をめぐる特集をおこないましたが、その後の動向をリポートします。まず初めに昨年10月におこなわれた二つのシンポジウムについて、2番目に兵庫県が実施している震災資料の調査・収集事業とメモリアルセンターとの関係について、最後に今年に入って急遽浮上してきた、メモリアルセンターとグローバリゼーションの問題を取り上げます。今後さらなる公論を待ちたいと思います。

レポート① メモリアルセンターをめぐる2つのシンポジウム

寺田 匡宏

2000年10月14日(土)、10月15日(日)、メモリアルセンターをめぐって二つのシンポジウムが開催された。10月14日は兵庫県主催、10月15日は神戸大学震災資料に関する研究会主催（史料ネット、震災・まちのアーカイブ後援)のシンポジウムである。期せずして二つのシンポジウムが1日違いで開催されたが、神戸大学主催のものは1ヶ月前から計画・告知されていたのに対し、兵庫県主催のものは約2週間前に急遽決まったもの。深読みすると、県が民間のシンポジウムに日程をぶつけるという側面もあったようだ。

まず、県主催のシンポジウム（「阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)フォーラム」)だが、会場となった神戸市教育会館には100人以上が入りほぼ満員。県による動員もあったと聞くが、県民の関心の高さがうかがえた。会は、パネリストの意見表明と会場との質疑というかたちで進行した。メモリアルセンター展示・交流検討委員の端信行氏(国立民族博物館教授)、室崎益輝氏(神戸大学都市安全研究センター教授)、堀内正美氏(がんばろう！神戸)、斎藤富雄氏(兵庫県防災監)がそれぞれの立場からメモリアルセンターに望むことを述べた後、会場からの質疑に移った。会場からは「震災の揺れを再現することはよいのか」等の意見が出されたほか、歴史資料ネットワーク代表の奥村弘神戸大学助教授が、「まだ揺れがある状況にもかかわらず震災を描くことは可能か。神戸の開発の歴史も含めて功罪の歴史を展示に組み込む必要がある」と発言。また寺田の「分散型の施設にすることはできないのか」との意見に対し、県ナンバー3の斉藤防災監が、国が支援する県立の施設としてはあくまで現行の規模が必要と応答する場面も見られた。意見表明が相次ぎ参加者の関心の高さがうかがえた会であった。

さて次の日に行われたのが、シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」である。これは神戸大学震災資料に関する研究会の主催によるもので、室崎益輝氏が基調講演、パネリストとし

NHKニュース（2000年10月15日6時45分）で取り上げられた神大主催のシンポジウム。左から室崎、佐々木、芝村氏。

て芝村篤樹氏(桃山大学教授)、佐々木和子氏(阪神・淡路大震災記念協会)、笠原一人氏(京都工芸繊維大学助手)、寺田(震災・まちのアーカイブ)が参加した(司会は奥村弘神戸大学助教授)。会は震災の記憶の継承がテーマであったが、内容はメモリアルセンターに関する話題に集中。芝村氏は阪神・淡路大震災記念協会の震災資料保存にアドバイスしてきた立場から、メモリアルセンターが協会の資料収集事業とミスマッチであることを指摘し、「収蔵スペースがわずか5百数十㎡しか計画されていない。このまま活用が保証されなければ資料が巨大なゴミの山になる」と発言。佐々木氏は記念協会の進めている調査収集について述べた。また笠原氏は設計をコンペで行うなど震災をメモリアルするためには違った方法があったのではないかと問題提起をおこない、寺田は民間アーカイブで震災資料の保存に携わってきた経験から資料を保存することは人と人のつながりを確認することでもあると述べた。討論では会場から「復興が終わっていないのに今なぜ作る必要があるのか」などの声も聞かれたが、「次の震災に役立てるために必要」という声も出、メモリアルセンターに関して多くの人が様々な思いを抱いていることが明らかになった。

なお、県ではこのシンポジウムの結果を受け展示・交流検討委員会を開催。本年3月に第2回の「フォーラム」を開催するという。公論の内容がますます問われる。(震災・まちのアーカイブ会員)

大震災の揺れ再現是か非か

県メモリアルセンター 体験継承で議論

神戸市内でフォーラム

大震災の揺れを再現する体感ゾーンはいるか、いらないか。神戸東部新都心に兵庫県が建設する「阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)」について、十四日、県民から意見を聞くフォーラムが神戸市内で開かれ、展示方法や内容をめぐり活発な意見が交わされた。

同フォーラムは県の主催で、センターについての意見を広く聞くため開かれた。県幹部らがセンター構想について意見表明した後、一般参加者約百人との自由討論となった。

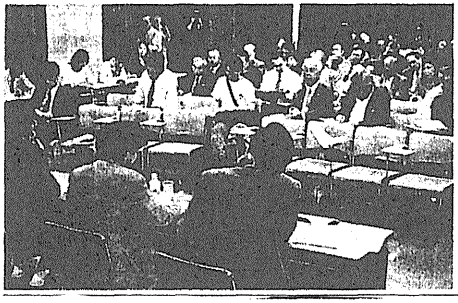
会場からは、ボランティアで震災の語り部を続ける男性が、「震災の恐怖は口で語っても、分かりづらい。被災を疑似体験するような感性に訴える展示が必要」と発言。パネリストの斎藤富雄県防災監も「センターは被災者だけのものではなく、全国の人が震災を学ぶ施設」とし「防災意識を高めるためにも体感ゾーンは必要」と賛意を示した。

一方、パネリストの「がんばろう神戸」代表堀内正美さんは「あの揺れは二度と体験したくないという人が多い。被災者も訪れる施設に作るのはいかが」と慎重な意見を表明。

会場の大学教員も「震災はまだ終わっていない。十年、二十年後ならともかく、今、揺れを作ろうとするから議論となる。もっと時間をかけて話し合うべき」と述べた。

同センターのあり方をめぐっては、十五日にも、市民グループが別のシンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝える」を神戸・三宮のフェニックスプラザで開く。

震災の揺れの再現をめぐり活発な意見が相次いだフォーラム＝神戸市中央区、神戸市教育会館



『神戸新聞』2000年10月15日

【メモリアルセンター計画の現在】

レポート② 資料収集とメモリアルセンター

季村 範江

昨年（平成12）６月より、県の外郭団体の阪神・淡路大震災記念協会（略して記念協会）が震災資料の調査事業を始めた。記念協会設立当初３名の担当者が，資料の保存と提供を呼びかけていたが、今回総額６億円の経費をかけ、２年間で延べ440人の調査員が収集に携わるという大規模な計画である。かつて行政がこれほど多くの費用と人材をかけ災害資料を収集したという話は耳にしたことがなく、成り行きはおおいに期待された。しかし実態は労働省管轄の緊急地域雇用対策（わかりやすく言えばリストラ対策）であるという。

調査事業は２年間を６ヶ月毎４期に分け、避難所、仮設住宅、ボランテイア団体など，資料を保存している可能性のある所を網羅的に調査し、資料の提供を呼びかけるという、まさに人海戦術で開始された。ほとんどの調査員は長年企業で働いてきたためか、当初は営業感覚が抜けきれず、調査先で齟齬やくい違いが生じることもあったようだ。しかし任期の６ヶ月が過ぎた頃、「資料というものは単なる紙切れではなく、そこにこめられた想いそのものであり、託し託されるということは想いを後世に伝達することである」と言い残して去っていった人がいたと私は聞いた。資料収集に携わってきたひとりとして、このような受け止め方の出来る人に継続して活動して欲しいと思ったが、事業は他の多くの人びとにも均等に仕事の場を提供することが主たる目的であったため、目覚めた時が別れという奇妙な事態が生まれた。現在２期目に入り，メンバーはすべて入れかわっている。

収集された資料は、2002年オープン予定の阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）で公開、保存され，震災の教訓を国内外に発信するために役立てることになっている。

「県が建設するメモリアルセンターで保存公開してくれるから、大切な思い出を提供する気持ちになった」と、やっと活動ノートを手放す決心をした人。自分たちの活動を記録した大事な写真を託すグループ。資料は予測をこえて集まっているという。そのことはメモリアルセンターという公共性に対する、人びとの期待と信頼の表れそのものではないかと私は考える。

しかし昨年夏公表されたメモリアルセンターの概要は驚くべきものであった。資料保存スペースは建物の床面積の1/10にも満たなく、現段階ですでに容量不足が判明しているというのだ。これからも続々と資料が寄せられているということが、予想されているにもかかわらず、十分な受け入れ体制がとられていないのである。

またメモリアルセンターは博物館として構想されていないため、展示に関しての専門家である学芸員を置く予定はないという。（博物館として登録するにはいくつかの条件を満たさねばならず、学芸員を置くというのもそのひとつである。）果たしてこれで震災を体験した人びとの想いを受け止め，後世に伝える施設となりうるのだろうか。多額の費用を使い、鳴り物入りで資料の提供を呼びかけていながら、このまま建設計画が進んでいくと，貴重な資料は死蔵という憂き目にあう恐れすら出てきている。

震災の記憶を後世に伝えるのがメモリアルセ

ンターである。震災が私たちの社会に何をもたらしたかということは、時間が経過しないと見えてはこない。20年、更に50年後という時間の経過と共に資料（特に一次資料）はいろいろなことを語りかけてくるだろう。

この土地で何があったのか、一人ひとりの声を聞き取り、その資料を未来につなぐのが公（メモリアルセンター）の第一の役目であろう。苦しみ悲しんだ人びとの想いを結果的に裏切らないよう、すでに建設が始まった今からでも，資料の受け入れ体制と活用方法の再検討と同時に資料とは何なのかという議論を積み重ねて欲しいと思う。

（震災・まちのアーカイブ会員）

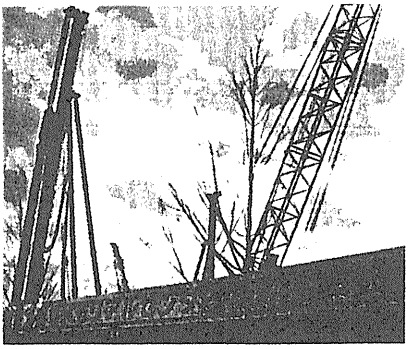
【レポート③】

グローバリゼーションとメモリアルセンター

メモリアルセンターは、2001年1月6日着工祭がおこなわれ、現在建設作業が進められている。

さて、この間メモリアルセンターが新聞紙上で大きく取り上げられることがあった。2月5、6日淡路夢舞台国際会議場で開催された「世界防災会議2001」がそれである（『神戸新聞』2000年2月7日）。

日本政府、世界銀行、OECDなどが主催したこの会議にはメキシコ、アメリカ、トルコなど15ヶ国から延べ400人が参加し、防災について話し合われたが、その席上メモリアルセンターに防災関係の国際的施設を集積することが提言された。大島賢三・国連人道問題担当事務次長は同調整事務所を拡充し、国際的に災害を監視するアジアの拠点とする構想を提唱した。グローバル化と同時に、防災の観点が前面に押し出されてきたのである。



建設中のメモリアルセンター

兵庫県が発表しているセンターの組織案を見ても平常時の組織が、大規模災害に際して救援派遣チームに対応することを目的とした組織になっている。

しかしまず第1に、本誌で繰り返し指摘していることだが、資料の収集スペースは現時点ですでに不足が明らかになっており（阪神・淡路大震災記念協会「震災資料の分類・公開の基準研究会」試算）、資料や展示専門の職員の雇用形態も明らかにされていない。

世界防災会議で議長を務めた片山恒雄・文部科学省防災科学研究所所長は「メモリアルセンターでは、経験と知恵の収集・保存に加え、調査研究、国際的な人材育成の機能を併せ持つことが予定されています」と述べる。欧米では資料保存を担うアーキビストの地位が確立しており、国際社会で資料の収集保存を謳うなら、専門のアーキビストを置くことが必須の条件であるといえよう。

また第2に、たしかに防災の観点は必要であるが、メモリアルセンターに限って言うと設置の二大骨子のひとつは震災の記憶の継承であり、その旨が社会的にも認知されている。メモリアルとは記憶することである。なぜメモリアルセンターなのか、というそもそもの問いが薄れているのではないか。

グローバリゼーションの波に流されることなく初心の問いを私たちは発し続けなくてはならない。

（寺田 匡宏）

【近況】

震災の〈質感〉

辺見庸さんとの公開対談のこと

菅 祥明

昨年12月、作家の辺見庸さんと対談した。しかも、公開の席でだ。

きっかけは、関西大学の先輩で現在は「(財)公害地域再生センター(あおぞら財団)」職員の片岡法子さんから電話をいただいたこと。片岡さんの関わっているNGO関係のグループが大阪の応典院というお寺を借りて「21世紀法要」というイベントを企画し、辺見庸さんと若者の対談を考えているが、出てくれないかと言われたのだ。承知したものの、チラシを見ると「新世紀を生き抜く思想と身体を育むために」と題されたイベントのメインは辺見さんと僕(もう一人対談者はいたが)との対談のようである。対談の日が近づくにつれてどうしようか色々悩んだが、何日か前に「辺見庸くらいの大物だから小細工せずにありのままの自分をさらけ出さなくてはアカン」といわれ吹っ切れた。

当日の会場は120人の人が入ったという。その大半が20代、辺見ファンと思われる若い女性の姿も目立った。

僕の出番は3番目で、20世紀の出来事のスライド、実行委員会による辺見さんへのインタビューの後、「辺見庸と若者によるセッション」である。その場で話したのは、自分の震災体験と半世紀以上前に亡くなった祖父のこと。最近その手紙や写真が発見され、それをきっかけにずっと感心と疑問を抱いていた祖父のことを調べてみようと思ったが、それはなぜか。自分は震災で居場所を失ったが、祖父は戦争を経て、その家族や子孫の記憶の中の「居場所」を失いかけているのではないか。そんなことを話した。

対する辺見さんは、黒のキャップをかぶり、黒のジャンパーに登山用のごついブーツ姿。何日か徹夜していたというが、僕の話にからめて内戦地での取材活動の話などをされた。

「原質とは何か」。辺見さんはこんな言葉を使った。「質感を大切にしろ」「今、生きていく中で表現の質感が失われている。自分の体の奥底から出てくる質感が大事だ」「異和感こそが質感である」。僕にとっての質感とは何だろうか。地震の後、これまでどう進めばよいかわからなかったが、そのモヤモヤ感が僕にとっての質感ではなかったか。そんなことを考えた。

辺見さんの印象は、ジャーナリストというのではなく、猟師か木こりがブラッと町に下りてきた感じで、分厚い存在感を持った人だった。対談を終えると、ヘトヘトになり精気を吸い取られた思いをした。しかし、その後、参加者の中から個人的に話を聞いてほしいという人が現れたりで、よかったと思っている。

辺見さんは「君は鉱脈を掘り当てたんだからそれを大切にしなくてはならない」とも言われた。対談を終えて、自分がやろうとしていることは間違いではないというかすかな感触を持った。また〈質感〉と言うことばも辺見さんから投げかけられた課題である。だが、本当のことを言うと、まだよくはわからない。これから考えてゆきたい。[談]

(震災・まちのアーカイブ会員)

【BOOK REVIEW】

『神の子どもたちはみな踊る』からのメモ

木内 寛子

『神の子どもたちはみな踊る』は連作《地震のあとで》として、「新潮」1999年8月～12月号に発表された「UFOが釧路に降りる」「アイロンのある風景」「神の子どもたちはみな踊る」「タイランド」「かえるくん、東京を救う」に書き下ろし「蜂蜜パイ」を加えて単行本になったもの。

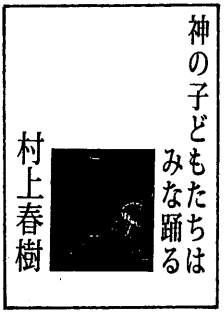
マスメディアをとおして神戸におきた大地震を知った、関東地方に生活基盤をおく人たちの、地震の翌月、2月、のはなしである。各々の表題から察せられるように、神戸の地震のことが表だって書かれているわけではない。

小説を読むのとは別のことかもしれないが、読後に、想像力というものごと、そして地震もまた、時間と空間をふくめる世界を一枚の布とみるとき、その布を織る糸であること、織られた布をみるとき、見ようによってその布の柄に見えもするし、他の柄(ものごと)の地にも見えるということ、を考えさせられた。

〈目に見えるものがほんとうのものとは限らない〉。〈すべての激しい闘いは想像力のなかでおこなわれ〉。〈真の恐怖とは人間が自らの想像力に対して抱く恐怖のこと〉。

想像力(見えないものを思う力)がいちばん表に出ているのは「かえるくん、東京を救う」だろう。

正義、名誉、信じる、といった一見確固とみえるものごとも想像力に属するのかもしれない。とすれば、想像力は、人間の生き方を、人間における世界を、規定すると言えるかもしれない。



メディアを介して、唐突に事実という空っぽの箱が目のまえに置かれかねない現在、関係の目がなければ、それを埋めていく想像力、ひいては人間は、狂いかねないのではないだろうか。

地震を織り糸(要素はひとつではないから一本ではないだろう)と書いたが、私(たち)自身もまた織り糸である。いろいろなものごとが、相互に関係をもつものとして、織りこまれてある布、の。その布を思うとき、私の目に、人間もまた、ことばのない、他の生き物、ものごと、と同様の相をおびてくる。〈神の子どもたちはみな踊る〉、この単行本の表題となっていることばがうかび、あっと思う。この地上にあるものとして、人間の特権としてあることばでではなく、ことばはなく、ある。そうせざるにはいられなく、踊る。その一瞬。それは、地震に出会ったときの、私(たち)のあり方に似ているのではないだろうか。そのあり方になつかしいものを感じて、おどろいている。

2001. 1. 12.

・村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』新潮社、2000年2月。〈〉内『神の子どもたちはみな踊る』からの引用。

(震災・まちのアーカイブ会員)

会員を募集しています

震災・まちのアーカイブでは会員を募集しています。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、是非ご参加下さい。

賛助会員も募集しております。賛助会員には『瓦版なまず』『なまずブックレット』『《叢書》震災・記憶・記録』、研究会のご案内をお届けします。

年会費は一口1000円。振り込みは、郵便振替 00920-2-125759　震災・まちのアーカイブまでお願いします。

【ビデオ紹介】

『すきなんや この町が』

伊藤 亜都子

震災直後、社会学の避難所実態調査で神戸市灘区六甲小学校に入ったことがある。当時の調査は避難所運営について施設管理者、リーダー、ボランティアの代表者から話を聞くというもので、避難所となった体育館を直接調査することはなかった。しかしそのときのリーダーの話や被災者の多さの迫力が印象に残っており、六甲小学校は気になっていた。ビデオ『すきなんやこの町が』は、その六甲小体育館のドキュメンタリーである。パート2完成を機に、このほど開催された上映会に参加した(2001年1月9日、神戸三宮フェニックスプラザ)。

作品は、パート1が震災直後の避難所(体育館)の状況と仮設住宅への、パート2が仮設住宅から公営住宅への、いずれも移転をめぐる人間像を追い、その過程での葛藤、つぶやき、思いが切り取られている。つらいエピソードも多いが、笑える場面もある。たとえば、おばちゃんが避難所から仮設に移ると「避難所はよかった」と言い、仮設から公営住宅に移ると「仮設はよかった」と言う姿など。社会学の立場からすると、組織運営やリーダーの問題に目がいく。しかし、この作品で描かれるのは、あくまで被災者たちの人間くささである。考えてみれば、組織もリーダーもその人間くささがあってこそである。社会学にどう組み込むのかがこれからの課題だと思った。

会場には多くの出演者が詰めかけていた。「あんたあのころは若かったなあ」「せやせや」。記念写真撮影なども行われ、和気あいあいとした雰囲気だった。それはそれで良かったのだが、少し内向きではなかったか。この作品だけの問題ではない。体験者以外が震災を共有することは可能か。6年目以降の震災の発信の仕方の問題でもあると思った。[談]

(神戸大学大学院博士課程、社会学)

※ビデオはドキュメント・アイズ作製。パート1:5000円、パート2:3000円。問い合わせ03-3389-3292

【震災・まちのアーカイブ資料紹介】

ミニコミ資料の整理状況について

藤原 直子

現在、アーカイブでは、ミニコミ誌資料の整理作業が進んでいます。「震災・活動記録室」から引き継いだ資料、「阪神淡路コニュニティ基金」から寄贈された資料、さらにアーカイブが独自に収集した資料の中から、ミニコミ誌を取り出し、タイトルごとに発行元、発行年月日を記入した資料目録を作成し終えたところです。「震災・活動記録室」から引き継いだ、既に整理済みのミニコミ資料の目録タイトル数が、51点。そして今回、新たに整理、作成されたミニコミ資料の目録タイトル数は、235点に及びました。

創刊から終刊まで揃っている物、数刊しか揃っていない物など、収集状態は様々ですが、震災に関わったボランティアの、その時々の状況を伝える貴重な資料となっています。被災地における時間の経過と共に、変化して行く活動の流れが、定期的に刊行されたミニコミ誌によって、より読み取りやすくなっているのです。

こうして自分が、ミニコミ誌を作る側になって、被災地での活動を続けながら、休まず紙面で情報を送り続けた各誌の、その労力と必要性を、改めて感じ入る事ができました。整理作業は、あと少しのファイリングを残すのみとなり、目録に登録された各誌が棚に並ぶ日も近く、公開の時を待っています。その際は、是非、長田の街のアーカイブまで足を運びご覧になってみて下さい。

(震災・まちのアーカイブ会員)

【書評再録】

『週刊読書人』2000年12月22日

二〇〇〇年回顧

動向 収穫

新しい展望

丹念に薄皮を一枚ずつ剥ぐような操作が、歴史を知ることや読むことを曖昧の味にする。原武史『大正天皇』（朝日新聞社）は、病弱な大正天皇という通念を問いなおす作業を通して昭和天皇制論ともいうべき新しい展望を開いた。何を通して歴史を問うかという設問それ自体が歴史叙述の意義の判定基準となる。地域を拠点とした青井哲一『近代日本海地域社会史の変容』（青木書店）、メディアをめぐっては問い方とその素材が奥武則『大衆新聞と国民国家』（平凡社）、北田暁大『広告の誕生』（岩波書店）、土屋礼子編『日本帝国統新聞集成』（CD-ROM版、文生書院）で示され、渡辺節を取り上げた兵藤裕己『〈声〉の国民国家・日本』（日本放送出版協会）、マイノリティを問いの核においた今西一『国民国家とマイノリティ』（日本経済評論社）がある。近代日本を問う国民国家論が定着しつつある一方で、「国民国家だからこそ」という定型の論述もみえる。

丹念な実証作業は、一つに歴史叙述の主道としての通史に結実するのだろう。シリーズ「日本歴史」（岩波ジュニア新書）が田中彰『明治維新』・由井正臣『大日本帝国の時代』・塚野敬『日本の現代』（№7～9）で近現代史を対象とし、全二巻を予定する「日本の歴史」（講談社）はその№00の網野善彦『日本とは何か』で、現在における歴史認識を問いうることを主張した。しかしこれらの通史は、「日本」的に通観した叙述ではなく、多様な系譜の流在を記す文学史を書き、唯の歴史をどのような場において書くのかを丹念に考えた軌跡にテッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める』（大川正彦訳、みすず書房）がある。「何枚もの舌」と問う構えの弱さが顕われている。一方で「日本人」による「歴史学」の外からの作業としての『トレイシーズ』（岩波書店）の創刊は現代史の一つの出来事である。

●近代以後

丹念な実証作業を通して

主道としての通史に結実

阿部安成

経験を叙述する術

わたしたちは、人びとの多様な、しかし唯一性の強い経験を叙述する術を丹念に探らなければならない。大門正克『民衆の教育経験』（青木書店）は子どもの教育を通してその術を「歴史」に問おうとし、岡真理『記憶／物語』（岩波書店）は切実な過去の経験をどう述べたらよいのかを「記憶」を軸に考察した。導くの出来事がくりかえし語られる。「私にとっての水俣病」編集委員会編『水俣市民は水俣病にどう向き合ったか』（筑摩書房）と神戸新聞社編『大震災聞わずにいられない』（神戸新聞総合出版センター）は現代の出来事の証言記録となる。震災・街のアーカイブによる△叢書▽震災・記憶・記録の刊行が始まり、『「百合」との往還』『震災と言葉』の二冊が神戸から届いた。震災とその後の日常を丹念に生きぬく辛苦と微笑がかっしりつまった瑞々しい華奢の小冊子だった。（あべ・やすなり氏＝滋賀大学助教授・近代日本史専攻）

震災・まちのアーカイブではく震災・記憶・記録＞と題する叢書の刊行を開始しました。

2000年夏には、震災・まちのアーカイブ(編)『「百合」との往還』、季村敏夫・上念省三『震災と言葉』に2冊を刊行いたしました。いずれもA5変形版『百合』80ページ、『言葉』82ページ、定価各400円、震災・まちのアーカイブで販売中です。

購入希望の方は電話か、振り込みで電話は078-781-8891季村範江まで（夜間）、振り込みは送料(1冊180円，2冊240円）と代金を振り込んで下さい、振込先:郵便振替 00920-2-125759　震災・まちのアーカイブ。

活動日誌(2000年8月～2001年2月)

2000年8月13日(日)　『瓦版なまず』8号発行。

8月17日(木)　朝日新聞記者井上平三氏来所。メモリアルセンターについて取材。阪神・淡路大震災資料調査事務センター調査員酒井優一氏ほか来所。ミニコミの調査。寺田匡宏、兵庫県庁阪神・淡路大震災復興本部総括部メモリアルセンター整備室訪問。『瓦版なまず』を手渡す。メモリアルセンター展示・交流検討委員会の議事録閲覧を要望。

8月21日(月)　兵庫県復興本部総括部復興企画課室長藤原由成氏来所。「第1回阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)展示・交流検討委員会主な意見」を持参。

8月25日(金)　市民活動センター・神戸八十庸子氏来所。機関誌『みみずく』の取材。メモリアルセンターについて。神戸新聞記者西栄一氏来所。メモリアルセンターについて取材。

9月21日(木)　寺田、兵庫県庁県民生活部企画調整局へ。ヘルスケアパーク(メモリアルセンター二期工事)について取材。主幹出雲敦雄氏。

9月31日(土)　震災資料調査事務センター調査員4名来所。ミニコミ資料の整理。

10月5日(木)　尼崎市立地域研究史料館辻川敦氏、神戸大学文学部助教授奥村弘氏、京都工芸繊維大学助手笠原一人氏来所。10月15日開催予定のシンポジウムについての打ち合わせ。

10月14日(土)　季村敏夫、寺田、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター(仮称)フォーラム」(主催・兵庫県、神戸市教育会館)に出席。

10月15日(日)　シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」開催。神戸大学震災資料に関する研究会主催、震災・まちのアーカイブほか後援。寺田パネリストとして出席。

10月28日(土)　震災資料調査事務センター酒井氏来所。第1期事業の完了に伴う事務事項の引き継ぎ。

11月2日(木)　朝日新聞神戸支局遊軍CAP藤井匠氏来所。神戸大学震災文庫5周年に関する取材。

11月16日(木)　季村範江、寺田、兵庫県庁メモリアルセンター整備室に。展示構想などの進捗状況についてインタビュー。

11月28日(火)　NHK大阪放送局文化部ディレクター大坪悦郎氏来所。来年の1.17特集番組についての取材。

12月21日(木)　読売新聞大阪本社写真部尾崎孝記者の取材。鷹取中学にて。神生善美さん同席。震災後のボランティアに関する特集のため。夜、忘年会と笠原一人氏のヨーロッパ建築史探訪のスライド上映会。

2001年2月8日(木)　季村範江、寺田、兵庫県庁メモリアルセンター整備室に。展示構想などの進捗状況についてインタビュー。

カンパ、資料の寄贈ありがとうがございました(2000年1～2001年1月、敬称略)

阿部安成、井上朗，井上平三，今枝一夫、大門正克，落合祥堯，笠原和子，笠原一人，片岡法子，河村直哉，北川幸三，栗原哲也，小林正浩，小山仁示，貞丸節子，芝村篤樹，下野恵美子，高橋実，瀧克則，達脇明子，筒井耕二，富善一敏，西畑康次，萩原彰二，日比野正代，松本貢，三上裕，宮本佳明、森まゆみ，森山千代江，矢澤直子，八十庸子，山本正和，渡辺，匿名S，住吉コープボランティアセンター住吉グループ

【編集後記】▲節分を過ぎると少しずつ春の日差しになってきました。『瓦版なまず』9号をお届けします。今号は“6年目の1月17日”特集と、前号に引き続いてメモリアルセンターに関するレポートです▲アーカイブ事務所周辺の長田・御蔵菅原周辺は6年目にして徐々に再建が進んできたという感じです。この1月にはいつもお昼を買いに行く総菜屋さんが、これまでのプレハブから店舗を再建しました。新しい店に行ってみると、お兄さんの顔、本当にこれが同一人物かと思うくらい明るく輝いていました。ここにも少し春を感じたりもしました。【寺】

震災・まちのアーカイブ

瓦版なまず 10

特集　記憶の居場所、記録のかたち

2001年9月6日発行　［第10号］
発行人：季村敏江 編集人：菅　祥明
〒653-0022
神戸市長田区東尻池町1-1-4
神港金属㈱内
TEL 078-681-6231　FAX 078-681-6232

震災メモリアル施設は分散化されなければならない

笠原　一人

・体験の表象不可能性と共有不可能性

最近、震災後に被災地に移住してきたので震災を知らないし、震災については語ることはできない、と遠慮がちに話す人に出会うことがある。被災者の精神面の問題も解決していない状況の中で、新たに震災の記憶を共有できないという問題が顕在化しつつある。記憶の共有や伝達、表現のあり方を検討することが必要になっていると言えるだろう。

実はこの問題は今に始まったことではない。震災直後には、全国各地からボランティアとして被災地に来た人々に、被災者が罵声を浴びせたこともあったと聞く。何をしに来たのか、被災していない者に被災地のことが理解できるか、と。そこではすでに記憶の共有不可能性の問題が提示されていた。

しかし、震災を体験したからといって震災を理解し伝えることができるわけではない。体験を理解し伝えることは体験の言語化、記号化であり、それはもはや体験「そのもの」ではない。だから罵声を浴びせた被災者自身も、あの震災「そのもの」を理解し伝えることはできない。誰もが震災という出来事「そのもの」を理解し伝えることはできないのである。我々の前には、出来事の表象不可能性という現実が横たわっていることを認識しなければならない。

さらに、震災の体験は様々である。もちろん多くの悲劇が生み出されたかもしれないが、場所によって被害も異なり、個人によってその受け止め方は違う。そのような複数の体験の束でしかないはずの震災の記憶をどのようにして共有し得るのか。震災の記憶を共有することは、もとより困難を伴っている。

・震災メモリアル施設のあり方

震災を「メモリアル」するためには、何よりも、こうした現実の困難さが前提されなければならない。「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」（以下、「メモリアルセンター」）の問題点は、民主的でオープンな手続きを取らなかったということだけではない。結局のとこ

ろ、出来事の表象不可能性や共有不可能性という、震災の記憶をめぐる現実の認識が欠落してしまっていることに最大の問題がある。

「メモリアルセンター」は様々な機能が集中した「前向き」なものであることを特徴としている。震災の一次資料を網羅的に収集し、震災のすべてを検証し、後世に役立てようとする姿勢には、出来事の表象不可能性や共有不可能性への戸惑いは微塵も感じられない。それは、体験「そのもの」やその全体を伝えることが原理的に不可能であるということを無視して、それらを把握し得るような超越的な視点を安易に形成しようとすることに他ならない。

出来事の表象不可能性や共有不可能性という現実を前提とするのなら、震災メモリアル施設は、震災の痕跡をとどめる一次資料や関連資料の保存と展示機能を中心とした上で、被災地の各地に分散化されなければならない。施設が分散化されることで、資料の情報の全体はコンピューターを通じて同時に得ることはできたとしても、すべての資料「そのもの」に同時に到達することは困難になる。それは効率の悪いことなのかもしれない。しかしそれは、震災の記憶をめぐる現実を伝えるための表現として必要である。分散化されることで生じる物理的な距離が、震災という出来事「そのもの」やその全体に触れることができないという現実の確認を強いることになる。それは震災を「メモリアル」するにあたっての、一つの倫理だと言ってもよい。

また震災メモリアル施設の分散化は、資料が場所と不可分であることを示すことにもなる。資料は出来事の痕跡であり、出来事が生じた場所と切り離すことができない。記憶は痕跡を介してその場所に宿る。施設が分散化されることで、場所との関わりが密接にされ、記憶と場所とが不可分であるという現実を確認させられることになるだろう。コミュニティーの復活や素朴なヒューマニズムを求めているのでは決してない。それもまた、現実を直視する表現に他ならない。

・記憶の「分有」に向けて

ただし、表象不可能性や共有不可能性といった現実を前にして、立ち尽くしてしまうわけにもいかない。語り得ないからといって語ろうとしないことは、記憶の可能性を否定することに他ならない。表象不可能性や共有不可能性を前提としながらも、そこにある絶望や断絶を強く肯定し乗り越えて行かねばならない。

出来事を語るには言葉や形による抽象化を伴わざるを得ないのだが、逆に抽象化しなければ何かを伝え、表現することはできない。そもそも震災の一次資料も現実には被災地に遍在しており、たとえ複数の施設を分散化させたとしても、そこには必ず抽象化を伴ってしまう。出来事とその表象は、現実という具体性と抽象性との二つの極に支えられ、その狭間を往復している。そのような状況の中で我々は、分散化を前提しつつも共有を目指し、そのようなあり方に「分有」という積極的な意味を与えていくしかすべがないだろう。

それは、分散化されたそれぞれの場所で様々な記憶や声を聴き取り、また他の記憶や声を聴き取りながら、さらにまた他へと反響させていくようなコミュニケーションによって可能になるだろう。分散化された施設間で資料の情報を共有することもまた、そうしたコミュニケーションの一つである。もちろん、それはまた表象不可能性や共有不可能性を前提としたものである。そうした断絶や齟齬を孕みつつも、人々の記憶の宿る資料が長い年月をかけて集められ、徐々に堆積し、少しずつ共有されていくような、そんな施設が意図されねばならない。

様々な体験や記憶の束としての震災という出来事に「メモリアル」の形を与えるとするなら、もはやそんなあり方しかないだろうし、またそうでなければならない。それには、現実を悲観することなく、記憶の「分有」という積極性へと変換していくことが必要となる。震災メモリアル施設の分散化は、震災の記憶の「分有」への始まりに他ならない。

[かさはらかずと／京都工芸繊維大学工芸学部助手（建築史・都市史）]

「記憶のまち」のフィールドノート

蘇理　剛志

地震の後、僕は大学に進んで民俗学という学問に出会い、フィールドワークという調査法を習い憶えた。目的をもってある場所を訪ねて、その土地の風土や歴史と直接ふれ、地域の姿をつぶさに観察し、また地元の人々からさまざまな話を聞き書きしながら、それらの情報を通してモノグラフを描いていくことが、フィールドワークのひとつの醍醐味である。しかし、これまで地元である神戸のまちを歩き、フィールドワークをしてみようと考えることはほとんどなかった。それは、無意識のうちにこの住み慣れた神戸というまちを、<フィールドから帰ってくる所>として認識していたからなのかもしれない。

ところが、今年の春から進学のため実家を離れて、千葉県ではじめて下宿生活をすることになり、それまで日常的に目にしていた阪神間のまちの佇まいや、まちを見おろす六甲の山々や、浜風吹く大阪湾の景色などを眺めることができなくなった。すると、自分の生活と神戸との間にハッキリとした距離が生まれたせいか、神戸のことを振り返る気持ちも内から湧き起こってきて、われながら神戸に強い愛着を抱いていたことにあらためて関心をしている。

そんな中にあって、僕も一人の震災遺族として、震災でのさまざまな出来事と自分自身にある震災体験とを重ね合わせながら、震災から6年半が経過した被災地で、少しずつだが、フィールドワーカーとしての自覚した眼差しを持ちはじめようとしている。

今年の5月から僕は、数回に分けて神戸大学工学部の室崎益輝教授の研究室を訪ね、室崎ゼミの大学院生らが中心となって活動する「震災犠牲者聞き語り調査会」の、個別の犠牲者ファイル『いのち、そのとき』を資料調査のため閲覧した（註）。調査会では、震災による犠牲者が何故に亡くならなければならなかったかを、建築学の立場から犠牲者の遺族に聞き取り調査をおこない、遺族の語りを通して、その事実を具体的に見つめる作業を継続している。

聞き取った話は、調査員が責任を持って遺族ごとの個別ファイルを作製され、完成したものは協力した遺族のもとにも贈られている。僕も去年の6月末、この聞き取り調査に「協力者（話者）」として参加し、先日われわれ家族のもとにそのファイルが届けられた。いつもは「聞き取りをする側の人間」の僕が聞き取りをされるというのは、はたして僕がどんなタイプの話者なのかを知る上でもかなり興味があったが、その時に調査を担当した、僕と同年代である調査員の方々の誠実な態度にふれ、地震当時のことを率直に語りあい、この聞き取り調査の意義とさまざまな可能性について、考えさせられる所が多かった。今回の神戸大学への訪問は、この時の出会いがきっかけとなり、今度は「聞き取りをされた」僕が調査者の側にまわって、資料調査を試みたものである。

初夏の日差しの中を、僕は連日のように室崎研究室に通い詰め、研究室の一隅を借りて日が暮れるまでファイルに収められた遺族の証言を一冊ずつ読んでいった。ファイルの中に出てくる遺族たちは、調査をした学生たちの質問に応じ、あまり思い出したくないであろう家族の死について、揺れ動く感情を抑えながら内心を自分の言葉に紡ぎ出していた。なるほど、あの震災からすでに6年半が経過しているが、ファイルに記された遺族の一言一言を読み継ぐうち、時間の流れに逆らうように、瓦礫に埋まった街路や、崩れた土壁の臭いや、自動車やヘリコプターのざわめ

き、そして日常を足元からすくわれて非日常の世界にあふれだした人々のことが、目の前に生々しく思い起こされた。

震災を経験して、完全にぬぐい去ることはできない被災者の「震災の記憶」を背負う感覚。それは、おそらくこのまちで生活を続ける人々に強く意識され、震災遺族にいたってその深刻さを増していく。しかし、それは同時にいつまでも大事に抱きつづけていたい感覚でもある。個別ファイルは、そうした遺族の心の機微を的確にとらえていた。

「たとえば病気で亡くなった場合ならば、その症例を記録しておくことで研究が進み、同じ病気で苦しむ人々を救うことができるかもしれないのと同じように、震災で亡くなった彼らが残していったメッセージを何とか後世に生かしていける状態に持っていくことしか、生きている私たちが亡くなった方たちのためにしてあげられることは無いと思うのです。
そうすることで、〈息子〉のことを覚えていてくださる方、知ってくださる方がいて下さったら、それだけでもう……。」
「あまりにも悲しすぎて、今まで娘のことに関する取材は断っていました。しかしちょっとずつ考え方も変わりました。娘のことを忘れないでくれるなら世の中に出してもいいのではないかと…。
子供に先立たれるというのは本当につらい。子供を亡くした母親の気持ちはみんな同じだと思います。
若い人が亡くなるのが一番つらいです。しゃべりたくないが、忘れたくない。思い出さないようにしているんですが、思い出しています……。」

遺族たちが語るノンフィクションには、一篇一篇つらく重い事実が綴られている。しかし、当の遺族たち本人も、内心で日ごとに変化する故人を憶う気持ちを見つめ、故人の死をいったいどのように納得したらよいか、つねに故人と対置する自我の置き所を捜している。

また一方で、こうした遺族の話を受け止めようとする調査会の学生たちも、目を背けたくなるような辛い事実を前にして、自分がどのように遺族に向きあえばいいのかを模索し、遺族の経験を追体験しながら、この聞き取り調査の意味について、真摯に自問自答を繰り返す姿が記されていた。

「地震の悲惨さを伝えることがこの調査の主旨ではない。事例を分析して結果を出すことが目的でもない。『地震が伝える事実』を少しでも積み重ねて、人々の共通の認識として記憶に留めていかなければならない。」
「記憶にとらわれず、現在を、そして、未来に生きなくてはならない。しかし記憶を消すのはつらい。とらわれず、しかし反芻し、永く残る記憶となるように。そのためには、どのような作業が、そして過程が必要なのだろうか。」

このファイルは、ある意味で、調査を担当した学生たちの青春グラフティーなのでもないか。僕は、こうして「震災が伝える事実」にぶつかっていった調査員の言葉に強く惹かれ、共感をおぼえながら、その事実を見つめるための勇気をもらったような気がした。

今、巷には「震災を記憶しつづける」とか、「記憶を風化させない」といった言葉があふれている。たしかに、いい意味でも悪い意味でも、さまざまな「記憶」の集積が都市のかたちをつくり上げるのだと思う。だが、われわれは数年来のさまざまな活動を通して、未だこなれない「震災の記憶」の位置づけについて、苦慮してきたことを実感として知っている。

実際に震災を経験した人たちが、その体験や教訓を「記録」するのではなく「記憶」しなければならないと痛感しているのには、この「記憶」という言葉が、単に現代のキー・タームとして世間に遍満しているからという理由だけには止まらないだろう。もうひとつには、人々の眼前に

よこたわる日々の暮らしの中に、この「震災の記憶」と呼ぶべき何かをいつも感じながら生きていきたい、という信念にも似た欲求が存在するからだと思う。そういった意味において、「震災の記憶」は被災者のすぐ身近にいつもあるのが適切なのではないか。

震災後、被災地ではいくつもの思い出の風景が追憶の彼方へと去り、復旧後の繕いだらけな街角には、あらたに震災復興を記念したモニュメントや震災犠牲者のための慰霊碑が建立され、新しい「記憶の風景」を創り出しているが、おそらくこれから問題にすべきは「震災の記憶」の将来像についてであろう。もともと視覚的ではない「記憶」というものについて、被災者たちは外から与えられたカタチを「自分たちのこと」として真正面から受け入れようとしているが、そうなると、未来に向かって生きようとする人々も、具象化された「記憶」を前に、そこへ自己を従順に当てはめざるを得ないのではないか。

はたして、風景の中に凝固する「記憶」は、止め処なく流れる「現在」とどう対峙すべきか。このやや過剰にも映るメモリアルが、このまちに馴染み、生活のアクセントとして根付きうるのか。もっと「記憶のゆくえ」について語るべきではないのか。われわれは今、そうした設問の前に立たされている。

［そりたけし／総合研究大学院大学（民俗学）］

註：震災犠牲者の個別ファイルは、原則として３０年間非公開の形式がとられているが、調査・研究の対象として扱う場合にのみ閲覧が許されている。今回は、その聞き書きデータの中から、事前に遺族の方から閲覧許可がおりている約１１０の事例を調査した。

◇　小さな声の記録　◇◇

牧秀一著『被災地・神戸に生きる人びと』を読んで

季村　範江

できたてほやほやという感じの本を紹介する。「相談室から見た７年間」、震災後の神戸の現状を鋭く描いている。筆者は夜間高校教師。震災直後、避難所となった近くの小学校で被災者の悩みを聞いたり、いろいろな情報を伝える「よろず相談室」をいち早く開いた。避難所解消後は、東灘区内に小さな事務所を借り、以来今日まで彼らの話に耳を傾け支えつづけている。これは相談室が係わってきた被災地の記録である。社会の片隅で悩む人々の小さな声を丹念に拾い、被災地のいまだ癒されぬ問題点を具体的な事例をあげ明らかにしている。

問題は千差万別である。病気、失業、家族関係、落ち着き場所、老後の不安など個別的である。筆者は一人ひとりの傍らに足を運び、悩みを聞き、一緒に考え、解決方法を探る。しかしどの問題も当人が一歩を踏み出さない限り問題解決はない。また本人の努力や、民間ボランティアの力では解決できない問題にもぶち当たる。法律や施策に係わる問題である。行政の施策が、社会的に弱い立場の人によりそって考えられていない現状を、筆者はさまざまな現場に自ら足を運び鋭く指摘している。

「よろず相談室」はメンバー自身も被災者であるところに特徴がある。親の介護に携わっていたり、それぞれが問題を抱えながら活動をしている。しかも全員手弁当である。また代表者の意向により助成金とも無縁である。グループを支えているのは人々の熱い志である。ある人はお金を、ある人は畑でとれた野菜を、またある人は励ましの手紙を、全国から送ってくる。有り余る中からではなく、それぞれがほんの少し、自分の出来ることをする、その結晶が「よろず相談室」を支えている。この夏、国連の居住権問題を考える会議でこの本に書かれている実例が紹介されたと聞く。是非手にとって読んでいただきたい。

［きむらのりえ／震災・まちのアーカイブ会員］

『被災地・神戸に生きる人びと』岩波ブックレットNO. ５４０（本体440円＋税）

対話は記録されるのか。

市村　登和

六甲は、私と「私文書の収集・提供」を結び付けてくれる奇縁の場所なのかもしれない。この夏、避暑に出かけた六甲山で稲葉洋子さん*と再会した。「記念碑台」という場所での突然の再会は、お互い仕事上の行き来がなくなっていただけに、縁を感じずにはいられなかった。

神戸大学は、私が「私文書の保存」に強い関心を持つきっかけを提供してくれた場でもある。私は、神戸大学で開かれたある講演会**で、神戸大学国際文化学部助教授(当時)の中野聡氏の講演を聴いた。中野氏は、日本にはほとんど存在しない「私設文書館」ができることによって、政策決定過程の資料や個人の記録が残されていくのだ、と説いた。印刷された資料、すなわち図書や逐次刊行物を公開している図書館に勤めていた私にとって、このような文書館が海外に多く存在するという事実は衝撃的であった。そして、機会があれば中野氏が言われるような私文書の保存、特に現代資料の保存に関わる活動に参加したい、と強く希望するようになっていた。

このような後に新聞記事で「震災・まちのアーカイブ」を知った私は、その活動に参加するようになった。おそらく初めのうちは他のメンバーと随分違うスタンスだったはずだ。なぜかというと、当初新聞記事で私が注目したことは、「震災」をテーマとしている、というよりも、「私文書」を収集していることだったからである。一被災者としての共有体験はあったものの、「資料を提供する場」では黒子になることが求められていた図書館経験からは、資料の管理者自身が語るという発想は全くなかった。それゆえ、資料や活動との関わりについて何か書くように求められたときなどは、心底驚いたし、たじろいでしまった。

けれども、資料が保存されている場所に赴き、目録を取りながら資料を手にとっていると、それらの資料が単なる印刷物や伝達メモで終わらないということを実感した。例えば一枚の連絡用紙でも、「なぜそれが保存されているのか」、「何を伝えたかったのか」、「どこへ伝えたのか」、そして「その結果は満足いくものであったのだろうか」などといった、紙を通しての対話が私の中で起こってくるのである。

そして、活動が4年目に入った頃、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」構想が伝わってきた。震災の記録を継承するためのセンターとなること、「メモリアル」ということばの響き、そして自分が携わっている活動から、私が感じたような対話を可能にする場が被災地にひろく提供されるのだ―、と少し安心した心持ちになっていた。

しかしながらセンターの構想が具体化されるに従って、それは私が感じたような対話の場から程遠いものになろうとしている。この現実を、嘆くしかないのか。例えば、デジタルカメラで現物資料を撮影してデジタルアーカイブとして展示するから、現物は収蔵庫へ、と言う。それは、旅行に行く前に何度も現地を紹介するビデオを見た後、旅先で「あっ、ここはビデオで見たところだ！」と叫ぶ可笑しさと同じではないのか。デジタルアーカイブは、あくまでも現物を被写体とした資料の二次的産物である。ビデオで観る以上に実際の旅行が伝える感動があるはずだ。

「メモリアルセンター」に修学旅行生が訪れたとしても、アトラクションや理念としての防災を学ぶだけでなく、一枚、一冊の、あるいは一個の現物資料に触れて、彼らなりの対話をし、そこから何

かを感じとってもらえる場であってほしいものだ。

六甲山上での奇縁が、東部新都心でも同じ意味の奇縁であることを願いたい。

［いちむらとわ／震災・まちのアーカイブ会員］

* 阪神・淡路大震災直後に神戸大学は震災資料の収集を決定した。その中で震災資料の収集・公開に奔走されたのが稲葉洋子さんである。なお、昨年度末をもって神戸大学を異動されている。

** 中野氏の講演についての概略は、次のURLに詳しい。

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kanpo/8-1/8-1-6.html

［他所からの視線・此処での視線］

とみさわかよの

現在建設中の阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）は、「震災の教訓を内外に発信し、全世界の共有財産として継承」することを目指す施設だが、実際幾多の問題を抱えたままである。

ところで、2000年に兵庫県立近代美術館が「震災と美術」展を開催した折、野田正彰氏*より「震災が社会や行政のあり方にも大きな課題を提起したにもかかわらず、それをテーマにした作品がほとんど見られない」との論評があった。ここに感じられるのは「他所からの視線」であり、他所から眺める者の願望であり、期待である。出展作家のひとりとしては、震災から５年という時間の中では華々しい問題提起や糾弾、誇張した表現をしない事こそが、「此処での視線」を持つ者（多くの作家は被災者でもあった）の制作態度だったのにと思えてならなかった。

さて、メモリアルセンターの構想を見ると「他所からの視線」を意識した要素が色濃く、これが被災地（者）から提案されたとは到底思い難い。被災者があの日の揺れや轟音の再生・焼け跡の再現を望むはずもなく、これは明らかに他所から来る者へのサービスであろう。ひとつの施設に震災資料の収集・保存・展示、支援のための人材育成、調査研究、果ては防災ネットワークに至るまでの過剰な役割を詰め込み、経験と教訓の発信基地になれと言うのは、所詮「他所からの視線」を持つ者の要望のような気がしてならない。

もはやここへ来て提言出来ることはわずかだが、これだけは主張しておきたい。ソフト面の整備、すなわち資料整理に関わる人材の確保である。資料の収集・保存は本来、「機能の四本柱」の一本ではなく、全ての基本となるべきであろう。震災対策も学術研究も、そして情報ネットもそれら資料を基盤にして始まるはずだ。資料を整理し、必要な者が永く活用できる形にして保存するためには、一定数の専門要員が必要となる。勿論、市民ボランティア・関連NPOとも連携すべきであろう。そして県はこれらが地道な作業である事を念頭に置いて、性急な成果を求めるべきではない。

事業の成果を入館者数で計っている限り、メモリアルセンターは団体客を呼び込むためのテーマパークに陥ってしまう。重視すべきは他所からの動員数ではなく、地元来館者である。メモリアルセンターが、「此処での視線」を持つ被災者の来館無しに、冒頭の役割が果たせるとは、とても思えないから。

［とみさわかよの／剪画作家］

＊野田正彰：京都女子大学教授（比較文化精神医学・精神病理学）

■神戸から佐倉へ、そして都留へ■

大門　正克

2001年5月18日、山梨県の都留文科大学で、「共生のまちづくり」をテーマにした講演会が開かれた。当日は、「多文化・多民族社会の実現に向けて」と題して吉富志津代さん（神戸・FMわいわい）が話し、ついで、「記憶とさまざまな声の歴史へ――神戸と佐倉のあいだで」というテーマで、寺田匡宏さん(国立歴史民俗博物館）が語った。

講演会は、いくつかのきっかけが重なるなかで実現した。2000年1月16日、『百合』*の読書会に参加した私は、翌日、寺田匡宏さんに鷹取や長田を案内してもらい、その時の印象や鷹取教会、FMわいわいなどの様子を大学の講義で紹介した。それを聞いていた学生の大井直美さんは、夏休みにFMわいわいを訪ね、吉富志津代さんを知る。FMわいわいから刺激を受けた大井さんは、講演会に吉富さんを招くように提案した。他方で、寺田さんが4月から千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に勤めることが決まった。そこから2人を招く案が浮かび、実現の運びとなったわけである。

開催に先立ち、学生たちは、吉富さんのかかわったドキュメンタリービデオ『多民族社会の風』を上映する事前勉強会を開いた。このビデオは、震災後4年間における在住外国人との地域活動を記録したもの。学生たちは、そこから、阪神大震災は多くの人びとに苦しみを与えたが、震災後の活動を通じて見えてきたものがあるのではないか。それを共有財産として被災地以外の地域にも伝えていくことができるはずだ。自分たちにできることは何なのか。共生のまちづくりをこの講演会場全体で考えたいと問いかけた。

吉富さんは、FMわいわいをはじめ、多言語センター、サッカー教室、ミニ図書館など多彩な経験を重ね、「多様性の重視と少数者の尊重」が大事だと思うようになったと述べた。寺田さんは、メモリアルセンターの構想、高校歴史教科書や日本史辞典のなかに記述された阪神大震災、高校国語の教科書にも採用された上念省三さんの文章（「風景が壊れている、そして私も・・・・」）など、震災をめぐるさまざまな声を紹介し、震災資料や歴史災害を記録し、展示することの意味を問い直そうとした。

2人の話しは、一見すると別個のもののようだが、そうではない。「多様性」をふまえ、「さまざま」な声を聞こうとする姿勢自体が、震災を通じて選びとられたものであるはずだ。と同時に、私にとって印象的だったことは、この講演会が山梨県の都留市で開かれたことだ。当初、こういう講演会が都留で開催できるとは思ってもいなかったが、よく考えればそれは不思議なことではなかった。神戸にいた寺田さんが佐倉に赴いて歴史災害の展示の構想を練る。都留で仕事をしていた私が神戸に出かけ、学生がまた神戸に行く。それまで何のつながりもないように見えた神戸、佐倉、都留は、こうして結びつけられ、交錯する。場所は、相互に問題を投げかけられ、新たな意味を付与されるようになる。3つの場所がつながってはじめて実現できた講演会自体が、「多様性」や「さまざま」といった言葉にふさわしいもののように思えた。

学生たちは、2人の話に耳をすまし、2人に質問し、自分たちにできることは何かと自問した。寺田さんは、後日、都留の学生の「まっすぐなまなざし」が印象的で、都留から帰るときと来るときとでは、自分が変わっていることに気づいたと伝えてくれた。そして私はといえば、神戸ははるか遠くにあるのではなく、都留のなかにも私の住む場所のなかにもあるのだということを再認識させられた。この講演会が教えてくれたことは、場所自体を多元化し、結びつけ、問題を相互に受け取ることが（あるいは結びつく糸口を探ることが）、場所を孤立させたり画一的に描こうとしたりする誘導に抗するひとつの方途になるのではないかということであった。そんなことを考えさせられた、5月の気持ちのよい講演会であった。

［おおかどまさかつ／横浜国立大学教員（歴史学）］

*『百合　亡き人の居場所、希望のありか』
河村直哉・中北幸共著　国際通信社　1999年6月発行

□２００１年夏、ヒロシマから□

辰巳　大輔

２００１年夏、ヒロシマ。私は原爆ドームの前に降り立った。西に傾きかけた太陽がドームを照らしていた。背後からは歓声が聞こえた。振り返るとそこには市民球場があり、ちょうど高校野球地区予選の試合中であった。歓声とブラスバンドの応援が周囲に響き渡る。球場からのにぎやかな歓声と、原爆ドームの静けさ。戦争と平和。その両者が併存する空間に私は立たされていた。不思議な思いにとらわれる。ドームのまわりには私以外にも何人かが立っていた。老夫婦の外国人も。ここに来る人はどんな思いでドームを見つめるのだろうか。私自身、何度目の原爆ドームだろうか。いつ来てもその存在感に圧倒されるが、心は妙に落ち着いている。

平和記念公園を歩くことにした。楽しげに騒ぐ若者たち、ベンチでおしゃべりを楽しむカップル、犬を連れた人がその前を通り過ぎて行く。日常の光景。その一方で公園内にはたくさんの慰霊碑があり、花束や千羽鶴が置かれていた。人々の平和への思いが託されているのだ。

原爆慰霊碑の正面の道を進む。慰霊碑の向こうでは「平和の灯」の炎が燃え、その先には原爆ドームが立っている。ここにもたくさんの花束。身の引き締まる思いがする。原爆死没者を悼み、平和を願う。多くの人々の思いがここに向けられている。後世に原爆の記憶を伝えようというその純粋な気持ちが、私に多くの問いを投げかけているように思えた。

ヒロシマに原爆が投下されて半世紀以上が経つ。その出来事を直接体験した人と、私を含めて戦争を知らずに生きてきた人との間には大きな溝がある。しかし、後世に出来事を伝える営みは大切なことである。時間や場所という障壁の存在、体験者の高齢化という困難な状況の中、ここで起きた出来事を伝えていくことの意味は大きさを増すだろう。

原爆、ホロコースト、民族紛争、震災、その他さまざまな暴力的な〝出来事〟。時間と空間を越えて、当事者と他者との間で〝出来事〟の記憶は共有されうるのか。もし可能なら、他者はいかなる記憶を共有していくべきなのか。常に問われる問題であり、最近特に鍛えなおされているように思われる。「他者としての私自身も常に試されている」と自覚しなければならない。

そんなことを考えながら原爆ドームが見える川沿いのベンチに座り、菓子パンをかじりつつ、ヒロシマを思った。そして、神戸を。「記念、記憶とはいったい何なのか」――そう問いかけながら私は公園をあとにした。

［たつみだいすけ／歴史学］

＜会員を募集しています＞

「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しています。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方は是非ご参加ください。賛助会員も募集しています。
賛助会員には『瓦版なまず』『なまずブックレット』『叢書　震災・記憶・記録』、研究会のご案内をお届けします。年会費は一口 1000 円。
振り込みは、郵便為替　００９２０－２－１２５７５９　震災・まちのアーカイブまで。

メモリアルセンター間近の出来事

—元禄から平成の人情—

季村　敏夫

二つの話から。先ずひとつ。七月、同窓会があった。身障者と高齢者を対象とした地域型仮設住宅で共同生活した人たちが久しぶりに集まった。虚をつかれたというか、再会は肺腑をつかれる思いがあった。わずかの間に皺もずいぶん深まったという感慨に虚をつかれたのではなかった。むろんそのことも含んではいたが、齢九十をこえ、「元気で会えて、ほんまよかった」、しみじみとつぶやく老人の隣で、放心したように目を瞑る、いまだ中年の域に留まる人の佇まいに私は震撼とした。その男性の住まいは現在私たちが問題にしているメモリアルセンターの間近にあった。当日迎えに行った時、目深に帽子を被り、顔の表情も定かでない人影が今にも倒れこむようにして乗りこんできた。ながい間風呂にも入っていないらしい。そのことによる臭いを覆うためか、外は激しい陽射しなのに汚れに汚れたジャンパーを羽織っていた。

車内へ充満した臭いへの驚きと、同窓会のあいだ、こちらが声をかける以外はほとんどうつらうつらの状態で首を垂れていた姿に、住まいはメモリアルセンター間近であったということがまざまざと思い起こされ、前面ガラス張りの建築物が隠蔽する深い病を垣間見たおもいがするのであった。

震災の死者の鎮魂を掲げ、ハイテクを駆使した国連防災機構まで入居するメモリアルセンターの間近、「また復興住宅での孤独死」、明日にもこう報道される予備軍的存在がひっそりと埋もれているということ。国連という発想まで導入する県の防災思想は、憔悴しきった一人の佇まいにより、誕生前に深い裂傷を帯びていることをいったい何人の知識人が自責をこめて受けとめているのであろうか。

そんな折、たまたま開いていた書物から、ひとときめ癒されることがあったので、そのことを二番目に紹介したい。

この春、思い切って宝井其角全集を購入、ぼちぼちと読みすすめている。其角といえば蕉門随一の高弟。師の「古池や蛙とびこむ水の音」に「山吹や蛙とびこむ水の音」と答えたこと、「海面の虹をけしたるつはめ哉」など色彩感覚の鋭さは群を抜いている。私は遊民である俳諧師が江戸の災害を如何なる視線でとらえていたのかという一点でひもといているが、中にとてもいいシーンがあった。

「起きてきけ此時鳥（このほとときす）市兵衛記」

心動かされたのは句の末尾、市兵衛の話である。安政大地震の遊女黛の話などは野口武彦氏や北原糸子氏により詳細に描かれているが、市兵衛も現在の問題と絡ませ論じられて然るべき人である。

元禄八年（１６９５）上総の国、姉ヶ崎村での出来事。村の田畑を荒らす猪や鹿に困った村民たちは徹底駆除を計画。総兵衛を総指揮役に選んだ。当時実弾使用は幕府により禁じられていたため極秘の実行であった。ところが総兵衛は誤って人妻を撃ち殺した。そのため死罪、他の村役人も厳しく罰せられた。市兵衛の主人次郎兵衛も連座、家屋敷はおろか所有する田畑すべて没収、大島流罪になった。次郎兵衛の家族はたちまち破産。その家族を下男の市兵衛は支えた。娘を売り、妻と離縁をして懸命に働きつづけた。しかも十一年。お上は市兵衛の忠節に感じ入り、次郎兵衛の田畑を市兵衛に与える旨伝えたがこれを辞退。旧主の子萬五郎に賜らんことを願い、聞き入れられた。『徂徠文集』には、この愚直なまでの忠節に対し、江戸の人びとの称賛をこえた深い同情の言が収録されているという。

以上が「起きてきけ」の背後に潜む歴史の事実であるが、其角は忠節を称賛するお上にむしろ警鐘を鳴らしている。道義の人市兵衛の行為は狂気とすれすれである。政事（まつりごと）さえ機能しておればこれほどの自己犠牲は無用であった。だからこそ市

兵衛は啼いて血を吐く時鳥にたとえられた。俳諧師の視線には、自己犠牲の裏側に潜む社会の構造がはっきりととらえられていたのである。

同窓会の日、一人にしておくとたちまち放心する人に、私たちは交代で声をかけたが、やがて夕暮れ、あの高層の住宅に送らねばならなかった。何ヵ月も閉じられたままの窓。フトン、食器、新聞紙が散乱する部屋でテレビもつけずうつむいたままの暮らし。間近で輝くメモリアルセンターのガラス窓。二つの話、その像が、深く刻印された。

文化十一年（１８１４）小林一茶は市兵衛の墓に詣で、「起きてきけ寝てきくまいぞ市兵衛記」とよんだ。平成の私たちは、江戸の人の叱正を心の中でどのように響かせればよいのであろうか。

［きむらとしお／震災・まちのアーカイブ会員］

・カンパ、資料の寄贈ありがとうございました（2001年２月～８月、敬称略）

寺内真子　大門正克　矢守克也　大谷渡　匿名希望

【編集後記】

◆今年４月をもって「震災・まちのアーカイブ」事務局長で前編集長の寺田匡宏氏が、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）へと活動の舞台を移しました。同博物館の公募企画展「歴史資料と災害像」に係わる共同研究に、寺田氏は歴史学の立場からアプローチを始めています。「震災・まちのアーカイブ」の中心人物が神戸を離れることは、たとえそれが一時的なものであっても多くの人に驚きと一抹の寂しさを与えました。◆さる７月８日、神戸市長田区で「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」と題したシンポジウムが行われました。現在建設中の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」に潜む数々の問題点を、様々な観点から検証しました。そしてそのシンポジウムが終わってしばらく後、本誌でく記憶の居場所、記録のかたち>という特集を組むことを決めました。◆人々の記憶はどのようにあるべきか、記録はどのような形態をもってこの世に現れ、残されていくのかー。また記録が形作られていく過程など、それらのことに関心と疑問が生じたのが発端です。当日のシンポジウムに出席された方を中心に執筆を依頼しました。それぞれ異なる立場から書かれているのですが、読み進めていただければ個々の文章がゆっくりと共鳴を始めるのではないでしょうか。強い主張、深い疑念、今感じているであろう迷いや不安、あるいは徐々に気付き始めた展望などを率直に記してもらいました。◆内情を知れば知るほど混迷を強いる前出メモリアルセンターは、以前から議論の中心となっていました。そしてそれに対する批判の論調で誌面を埋めるほうが、効果的かつ現実的かも知れません。ですが今回も「様々な声」を集めるという意識で臨みました。それは、つい見逃しがちな「声」、その場に立ち尽くして発せられる「つぶやき」を、たどたどしくもすくい集めることが何よりも大切と考えたからです。紙の色や誌面のデザインといった外見がどれだけ変わろうとも、それが本誌の変わらぬ姿勢と考えていただければ幸いです。◆◆神戸にいる人、神戸を離れて新たな地に向かった人、いつか戻って来る人ー。様々な位置から、「場」を想う。態勢を新たにして「震災・まちのアーカイブ」と「瓦版なまず」は歩んで行きます。

［菅］

瓦版 なまず

2001年12月26日発行［第１１号］
発行所　震災・まちのアーカイブ
〒653-0022　神戸市長田区東尻池町1-1-4
神港金属㈱内
TEL 078-681-6231　Fax 078-681-6232
発行人／季村範江　編集人／菅 祥明

語りえぬことを巡って　その二

季村　敏夫

―過ぎ去り行く者となりなさい―
『トマス福音書』註1

災厄のさなか、遠眼鏡を覗き続けるひとりの男。幾たびか旋風が舞い上がり、黒雲の柱、炎の柱が聳え立つ。劫火が拡がる。まるで生き物のようだ。

大旋風は辻から辻を伝い舞い上がる。劫火は男の背後に迫る。それでもわれ関知せずとばかり、夢中になってレンズに向かう。そのとき座敷の中を鼠二匹。あちらの壁に突き当たり、こちらの戸に転びながら狂ったように飛びまわる。その一匹が男の裾に駆け込もうとする。獣も人も狂気の時間を生きている。突然、もう「お逃げなさいな」とご近所の声。男は家族のものを先ず逃し、生あらば浅草観音堂でと再会を約し、黒煙が舞う家から一歩も離れない。視線を通した世界への係わり。視線そのものと化している。

遠眼鏡に映る惨事のありさま。川が燃える。舟が丸太が燃える。人の形まで燃える。厩橋と吾妻橋の上に押し合いへしあう人びと。やがて燃えあがる橋から、水めがけ飛び込む人影。水の間に高く突き出た二本の足。足の主は隅田の川なか。炎上する橋の落ちる瞬間、【これ人間としてつひに見るを許されざるもの】註2、悲鳴、怒号、呻き声、凄惨な光景が眼球に飛び込んで来る。オイディプス王のように潰されることなく、いっしんに見開れる眼球。男はレンズの向こうに何を視ているのか。阿鼻叫喚の向こうに生起するもの。そこに身を置くこと。レンズの向こうを読み取ろうと視線は釘付けになっている。註3

【惨劇を前にして、なおオペラグラスを手にするとは。】

その男、三味線が弾けた国文学者山口剛のつぶやきである。オペラグラスをカメラに置き換えれば、即座に出来事のさなかの写真家を表わした文章になる。惨劇は関東大震災。惨劇の一瞬を切り取った迫真の画像を前に、しかしあなたは目の前で苦しむ人を放置したのですねという問いは背後に隠される。この問いはだがかなりしつこい。ことある毎に発せられ、離れない。呻いている人と救助する人。レンズから凝視する人は、そこに居ながらそ

こには居ない。いわば第三の立場に佇む。助けそして助けられる関係からずれている。決定的に外れている。当事者から傍観者と呼ばれ、それを感受すべき位置にまた固執する。傍観者はよくはいわれない。とかく本当のこと（いわゆる内面の吐露）を表現したがる人びとから、「冷たい」とか「薄情な」という形容を与えられる。善意の行為に走りたがる人びとから批判を受ける非当事者。その非当事者の視線の彼方、そこに何が起きているのか。そこに身を置くこと。置き続け、さらされること。そこから何かが始まるような気がする。

【この惨劇を前にして、なほオペラグラスを手にするとは。斯ういうてわたしを叱責する人もあろう。余りに情知らずと罵る方もあろう。けれど、わたしは単なる好奇を以てこれをなしはしませんでした。それを手にする時、わたしはそれだけの代償をおく決心をしました。人の災難をかういう態度を以て眺めるには、自分もまたそれ相当な償を払うべき事は知つてゐる。】

まぎれもない文人の態度である。むしろ災厄に遭遇すればよいとした古風な潔さがある。山口剛は事態をただ単に眺めている訳ではない。凝視する。今ここで、ひたすら視ることが現場であった。しかも凝視の場は突如舞い下った。自ら選んだのではなかった。気づけばその場を選ばされていた。困窮する人の救助ではなく、消火する役でもなく、向こうから凝視の場が与えられる。それ相当な代償、万巻の書物は灰燼に帰してしまった。そのなかには天下ただ一本と称してよい和綴じ本や漢籍も少なくなかった。

山口剛
（1884～1932）

【持つてゐるすべてを焼かう、すべての書籍を焼かう。その代りに、どの書籍にも書いていない大正の今年今月今日のこの惨状を、せめて見る範囲が狭いにせよ、心ゆくかぎり、見ておこう、かう思つたのでした。】

レンズと係わりながら彼は距離を測っている。出来事そのものからの距離を測定している。視線を通し、世界と自分との係わりのすべてをとらえようとする。傍観の傍の意味は、そば、かたわら、ほとり、決してただなかではない。そこから逸脱している。このズレが齟齬を生み人を表現へと駆り立てる。身体行為と認識の二元論ではない往復運動が孕まれる。行為と認識が互いを犯しあう場。知ることの拒絶としての身体行為。行為の拒絶としての認識。侵犯する二つが激しくせめぎ合う場が言葉を生み、映像表現を生み出す。拒絶の強度にとり衝かれた男。部屋に閉じこもり、ひたすら凝視に賭ける者の営みもまた行為そのものといえよう。

だから距離にはおかしさがある。腹の底からおかしさがこみ上げて来る。笑うことすら笑ってみせる自己批評が生まれる。【ふと一坪半の庭、これも庭といへませうか、その庭めく片隅には睡蓮の鉢がある。それは、此頃掬ひとつた目高や鮒の宿です。その宿が今の地震で荒されて、水の大方がこぼれてしまつたのを見ました。瓦斯はとまつたが、まだ水道は何事もない、その水を汲んで来て、鉢に入れてやり

ました。小魚にも御飯を食べさせてやろうの趣向でした。】極限状況のなかのこのふるえ。こんなデリカシイの持主に阪神大震災ではついぞお目にかかることはなかった。【この一夏をわれと暮らした目高や鮒へのせめてもの末期の水】を。距離の中からしか生まれないつぶやき。なんとお洒落なことか。ダンディズムの極北であろう。

山口剛は俳諧師其角を慕った。元禄十一年の火災で家を焼き、貞享元年以来一日も怠ることのなかった十五年の間の日記を焼失させても、幸いなる哉と言い放った其角の俳諧精神にことのほか関心を示した。その其角は自ら編んだ『焦尾琴』で「焼のこる琴に恨みの柳哉」と詠んでいる。

とここまでたどってきた時、さきの十号の拙文冒頭で紹介したＡさんの死を知らされる。「仮設住宅での孤独死」はよく報じられた。被災者が「復興住宅」に転居してからの「孤独死」は、だがほとんどメディアに掲載されることはない。なぜなのだろう。メディアはなぜ自己検証できないのだろう。ボランティア活動をあれほど美化し取り上げてきたのなら、現状の姿をつぶさに検証する作業は欠くことが出来ないはずなのだが。

世界の片隅で、死は乾涸び絞り出されるようにひっそりと転がる。おそろしいほどの静謐感をひきつれ。テレビが空爆の映像をいかに伝えようとも、部屋の片隅そこで、あろうことか虫ケラと同じレベルで死は人を襲う。私たちとの団欒が七月、その一ヶ月後Ａさんは死体となって部屋の中で発見された。暑い一日でした、部屋も外も。でもおだやかな死顔でしたとは第一発見者の弁。註4

目の前の困窮者を救助しないからといって傍観者を弾劾してはならない。傍観をなめてはならない。それは思想の貧困を物語るだけである。外部で何が起ころうが凝視する行為で対峙する者。いまや傍観者の視線はもっともラディカルである。雪崩れをうつ他者への善行、その傾向をむしろ気持ち悪いと感じる距離の精神をそろそろ認めようではないか。世界への哄笑、どのような事態に襲われても平然と笑って跳ね返すことを思い起そうではないか。

語りえないものがもがいている。関東、阪神、大震災。つぶやけばただの言の葉。それにしても、つぶやいたかと思うと襲われる、このふるえはなんだろう。語られるときの小さなふるえ。言葉を生み出す出来事の記憶とはなんであるのか。出来事の向こう側、そこに降り積もり沈むもの。沈黙。語ろうとして語りえぬつぶやき。もはや語れない死者のざわめき。何事か終わった後、私たちの視線の向こうに生起するもの。遅れてやって来るものをとらえる試み。私たち、さらに遅れて訪れる次なる私たち。幾たびも繰り返される、語りえぬことを巡る試み。伝えられることを求めるためらいがちな反復。そこに、私たちの記憶と記録の場所があるように思えてならない。（つづく）

［震災・まちのアーカイブ会員］

註１：荒井献著『トマスによる福音書』（講談社学術文庫）による。トマス福音書はキリスト教史上最大の異端として弾圧抹殺されたグノーシス派の立場から編集されたイエス語録集である。通り過ぎる。われらはただ通過するだけ。出来事との係わりを考えるにあたり、じつに示唆深い言葉ではないだろうか。

註２：山口剛の言葉。関東大震災に関する山口剛の言葉は永井荷風『断腸亭日乗』に勝るとも劣らぬおののきがある。自警団の一員となった芥川龍之介の「大震雑記」を遥かに凌駕していることは言うを待たない。引用のすべては昭和五年十二月武蔵野書院から出た『断碑断章』の中の「火をくゞりて」によっている。『断碑断章』は江戸期の災厄をくぐり抜けた歴史的碑文に関する記述である。阪神大震災後、倒壊した建物から古文書などの救出活動に係わった若い人は、どうしてこの書に言及しないのだろう。他のエリアにも是非関心を示して頂きたいものだ。加藤郁乎氏によれば、三田村鳶魚とこの山口剛、水谷不倒を漁れば江戸文芸の真髄はほとんど身体に入るとされる。昭和四十七年中央公論社から全六巻の山口剛著作集が出ている。

註３：鷺田清一氏の「顔へのまなざし」（平成１３年１２月１２日、日本経済新聞夕刊）という随想がこころにとまった。「見えるものにかかわりすぎるというところに、いまのわたしたちのまなざしの衰弱があるのかもしれない。」これは、見ることの自明性を疑う言葉である。私たちは本当に見ているのだろうか。見えるものの彼方を見ること。そのことがたいせつだと思った。引用された文はこう結ばれている。「テレビ報道を見ていて、ふと、そう思う。アフガンでの戦争を、そしてそれへの日本政府の対応を映像で見ながら、わたしたちは顔でなく、顔面ばかりを見ているのではないか、と。いま起こっていること、それはいったい何なのかと。」

註４：ちょうど同じころ毎日新聞社シリーズ『２０世紀の記憶』の元編集長西井一夫氏の死を告げられた。ここ数年の氏の仕事へのま向い方は余人を寄せ付けない厳しさと激しさに満ちていた。多忙な中からいただいた激励の手紙をかたじけなく思い起しながら、戦死ですね西井さん、と私は晩秋に立ちつくしていた。最後の著書は『２０世紀写真論・終章』（青弓社）。

＊編集部註：顔写真は『江戸文学研究』（山口剛著、東京堂発行、昭和１７年）より引用。

◆

活動日誌（2001年２月～１２月）

２月１０日（土）『瓦版なまず』９号発行。

３月１５日（木）「市民活動センター・神戸」に「震災・活動記録室」より引継いだ資料目録を渡す。

３月２４日（土）鷹取中学校にて資料整理とシール貼り。夕方、季村邸にて寺田匡宏、蘇理剛志両氏の送別会。新年度より寺田氏は国立歴史民俗博物館の研究員に、蘇理氏は総合研究大学院大学へ進学。

４月２８日（土）辰巳大輔氏来室。ホームページ開設について会員と協議。辰巳氏、ウェブマスターに就任。

５月１９日（土）「史料ネット」の辻川敦氏と神戸新聞社の大国正美氏が来室。メモリアルセンター建設反対の意思表示について意見交換。

６月３日（日）島田誠氏を訪問。現状と意見を聞く。氏は「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」の展示交流検討委員会委員。

６月１３日（木）笠原一人、季村範江、菅が県メモリアルセンター整備室に計画の進捗状況を取材。

６月１６日（土）今後の活動の意見交換。

７月　８日（土）　フォーラム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか―メモリアルセンターの問題を考える―」開催。史料ネット主催、アーカ

イブ後援。笠原、菅がパネリストとして発言。
７月１９日（木）カセットテープ139本と目録を「阪神・淡路大震災資料調査事務センター」にMD化のために貸出。
８月１９日（日）「グループ１１７」の矢守克也氏来室。今後の活動について意見交換。
９月２２日（土）赴任地の千葉県佐倉市より寺田匡宏氏帰省。ホームページ完成を祝って辰巳、寺田、菅、季村敏夫・範江で「生誕祭」を開く。
１０月１日（月）ホームページ正式公開。
１０月１８日（木）NHK神戸放送局ディレクター近藤誠司氏来室。活動状況などを説明。
１０月２０日（土）建築家宮本佳明氏を訪問。「ゼンカイの家」見学とインタビュー。震災から米国における同時多発テロにまで話が及ぶ。
１０月２７日（土）鷹取中学校文化祭。避難所に関する資料を同校のコミュニティルームで展示。「パートツーCo.LTD」の柴山昌昭氏。児童向け演劇で震災の映像と写真を使うため、鷹取中学校とアーカイブを訪問。
１２月６日（木）寺田匡宏氏、震災資料調査のため来室。夜、「寺田氏を囲む会」。参加者７名。
１２月１９日（水）神戸新聞論説委員相川康子氏来室。メモリアルセンターに関する取材。
１２月２６日（水）アーカイブ忘年会。

【書評】

米田定蔵・米田英男著

『都市の記憶　神戸・あの震災』

蘇理　剛志

『都市の記憶　神戸・あの震災』は、長田区にくらし、神戸の魅力を長年にわたり撮りつづけている（有）米田フォトの米田定蔵・英男父子が、仕事の合い間に撮りためた震災前の神戸と、震災後の神戸の風景を、一冊にまとめた写真集である。

内容は、前半で震災直後の瓦礫の風景を、復旧後しばらくして、ふたたび同じ地点から撮影した写真が載せられ、震災からの時間の流れと、震災によって喪われた「都市の記憶」が表現されている。また後半では、神戸栄光教会、第一勧業銀行神戸支店、御影郷の酒蔵群など、震災によって喪われた建造物のもとのたたずまいや、それよりずっと以前にあった神戸の風景が収められている。

米田父子は、阪神大震災によって崩壊した思い出深い建造物を、ファインダー越しに「ガラスの一片一片をむき出した鉄筋の一本ずつを、道路の割れ目の奥まで、手をとるように、なでるように。焦点を深くして」

撮りつづけたと言う。そのためか、カメラはいつしか神戸の空気まで、被写体として封じ込めようとした意識さえも感じられる。

すでに震災を過去の出来事として冷静に見つめながら、それによって現在の神戸を逆照射し、さらに未来を見据えようとする米田父子の視線。ビルの倒壊した街路にも、人や車の往来もない崩壊した港にも、地震以前そうであったような、落ち着いたアングルが向けられ、なお漂うこのまちの豊かさを写し撮っている。この豊かさとはいったい何か。父親の米田定蔵氏は、この本の刊行にあたって、次のような言葉が添えられている。

思い出の場所を失うことは、これまでの 自分の歴史を失うことでもあります。(中略) 記録しておこう、というのは名分で、私を支えてくれているこのまちの記憶を、たとえそれが残骸になっていても、とどめておきたい衝動であったのかもしれません。

(「はじめに」より)

神戸のまちの風景を「記録」することが真の目的ではない。また、過去のまちなみを懐かしむという心理だけのものでもない。かつて、たしかに自分はこのまちを歩いていたという個人的な「記憶」と、今このまちを歩いて、いまだに街角に宿る「記憶の連続性」を、この写真集は指し示している。また、本の後書きに書かれた「あの日の朝から—あとがきに代えて」の一文は、被災者と同じ目線にたった写真家の言葉として、共感を持って響いてくる。

人は記憶に支えられて生きていくのだと 思う。このまちで暮らしてきた誇りは、このまちをともに築き、ともに楽しんできた記憶の積み重ねから生まれてきているのだと思う。

あの日から向こうにあった神戸、これから先の神戸。それをつなぐ記憶の糸の一本に、この本がなることができれば望外の幸せだ。

この写真集を出版するにおいては、米田父子も写真家であるより、まず神戸の住人であり、被災者である。そのため、これまでの震災写真集にあったような、誇張された空虚さや痛々しさは感じられない。そればかりか、いまはメリケンパークとなった神戸港の船溜まりにひしめき合う艀(はしけ)船の写真や、終章において六甲の山腹より撮った神戸を一望した写真からは、かつての神戸の生活臭のようなものも感じられるし、実在の風景を写しながら、むしろ心象風景的な効果が与えられているのにも気付かされる。

震災の前の神戸と、震災を経験した現在の神戸とをつなぐ一筋の通路。この後、この写真集は、なにより被災した者にとっての記憶の糧となり、このまちへの愛着を呼び起こしていくに違いない。

[総合研究大学院大学(民俗学)]

『都市の記憶　神戸・あの震災』
米田定蔵　米田英男著
株式会社エピック発行
定価　本体２０００円＋税

－ホームページ開設によせて－

辰巳　大輔

2001年10月1日、「震災・まちのアーカイブ」のホームページが正式公開された。「震災・まちのアーカイブ」がスタートして3年半。新たな挑戦としてインターネットという大海原に向かって静かに船出をした。

はじめて事務所を訪れたのは2001年の春。以前から私が“アーカイブ”の活動に関心があったことを知っていた菅祥明さんから「ホームページをつくりたい」という話があって、微力ながらお手伝いできるかもしれないと思い、ホームページ開設（電脳なまず計画）に参加することになった。

内容をどうしていくか、色やデザインをどうするかなどは夏頃までに話を積み上げていった。その成果はホームページ上にほぼ反映されていると思う。まず第1に“アーカイブ”の活動を知ってもらうこと。第2に収集した震災資料のデータベースをWeb上で公開すること。第3に既刊の『瓦版なまず』やブックレットなどを紹介すること。第4に現在の被災地神戸から新たなメッセージを発信するということ。

電脳なまず計画には当初から明確な目標があった。それは、内々の仲間だけの情報交換としての場ではなく、“世界”へ向けて発信するネット空間をつくることであった。私がはじめて会員の方々と話をしたときから「この神戸から世界へ」というテーマが挙がり、その高い目標に身の引きしまる思いがした。そしてそれが表れているのが第4の＜新たなメッセージの発信＞であり、Web上では『いま被災地では…』というコーナーにあたる。

さらに私が注目したいのは第2の＜所蔵資料のデータベース公開＞である。収集した震災資料の整理は現在も続いているが、そのデータをWeb上で公開することは「民間アーカイブ」の新たなる試みだと思う。まだ公開に至っていないが、目下作業中である。

インターネットは基本的には見せる側から見る側への一方通行である。作成者としては見る側がどんな反応をしているのか甚だ不安で、アクセスカウンターが気になる毎日である。しかしそこには新たなつながりが生まれ、ネットワークが拡がる可能性が含まれている。ときには目に見えるレスポンスがあるだろうし、厳しい批判もあるだろう。だがその反応に発見があり、自らを相対化し、新たな方向性を見出せる可能性を持つと思う。

公開当初は骨格だけで、ほとんどは「工事中」の状態であったが、時間をかけて一つ一つ肉付けをし、現在ではほぼホームページとしての体裁が整ったと思う。公開から約2か月たち、アクセス数は1000ヒットを超えた（12月5日現在）。まだ小さく覚束ない“船”だが、今後も新たなコンテンツを増やす予定である。

電脳なまず計画を通して私に新たな“つながり”を得るチャンスを与え、また素人の私を快く“ウェブマスター”として迎え入れてくださったみなさんに感謝したい。最後に、本号の『瓦版なまず』をご覧の方々が当サイトに立ち寄られることを期待したい。　［歴史学］

［URL］　http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/

E-mail　archives_kobe@nifty.com（事務所直通）

d_namazu@geocities.co.jp（テクニカルな内容はこちらへ）

＊当ホームページについてのご質問・ご感想をお待ちしております。

＊「Yahoo Japan!」には「震災・まちのアーカイブ」で登録しています。
そちらからのアクセスも可能です。

【12月12日の神戸】

「残響の日々」から

菅　祥明

１２月のある晴れた日、完成間近の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」の取材を兼ねて「HAT神戸」へ向かった。「HAT神戸」とは、災害復興住宅や各種研究機関、さらには企業なども入った複合機能都市である。そこは「東部新都心」とも呼ばれ、行政の言う「創造的復興」のシンボル的空間とも言えよう。文字通り三宮・元町の少し東側に位置する。

到着したのは正午前。県立の新美術館や「WHO神戸センター」を通り過ぎた後、目的の「メモリアルセンター」へ。まずは裏側から見る。想像以上に大きい。「全面ガラス張り」がこの建物の特徴だが、青黒く見えるガラスも既に張り終えているようだった。次に正面へ。全景を撮影。そして、「メモリアルセンター」前の公園に入った。昼食の準備をする子ども連れの一団、弁当を手にした工事関係者、乳母車や自転車も数台止まっていた。その公園の前には海がひろがっている。さほど浜風も強くない。すこし岸壁付近をぶらついた後、公園入口に戻った。

と、そのときふと、左手の方角で何か「白いもの」がはためいているのに気付いた。だが、その５０mほど先の状況から、その白いものの意味が即座に了解された。公園の一角に庇の付いた場所がある。そこには、家財道具を積み上げ、ベンチを寝床にする人が「住んで」いた。私が目にした白いものは、その人たちが日々使っているであろうシーツだった。工事用フェンスと樹木の間にロープを渡して、シーツや衣類を干しているのだった。まったく予期せぬ光景であった。

大方の用事を済ませた私は「HAT神戸」をあとにした。貨物線の線路を越え、山側に向かって歩き出した。国道２号線に出たところで方向を西に変え、三宮を目指して歩き始めた。１５分ほどしてJR三ノ宮駅前に到着。その日は「光の彫刻・神戸ルミナリエ」の初日であった(2001年「ルミナリエ」のテーマは「光の願い(Desiderio di Luce)」)。そごう、三宮センター街の前を通り過ぎ、市役所方面へ。「ルミナリエ」の会場である旧外国人居留地に至ると、人も車も随分と混み合っていた。点灯は夕方からだが、テレビの取材クルーは撮影準備に追われていた。人の流れを逆送しつつ元町に向けて歩き続けた。大丸前から元町商店街に。しばらく行ってから「南京町」に入ってみた。そこは中華料理店の密集する地区である。有名な豚まん屋には長蛇の列が。ベンチに腰掛けて唐揚げや団子を頬張る人も。その日歩いた中でこの「南京町」が最も人口密度の高い場所であった。そこを通り抜けて商店街に戻った。時計を見ると１時半を過ぎている。私はハンバーガーショップで遅い昼食。その後

店を出て、火照った体を引きずるようにして帰路についた。つぎは元町商店街を逆向きに歩き始めた。

けれどもその足取りはそれまでとは比較にならないほど重かった。私の頭の中では浜風を受けてはためく、あの白いシーツの残像が何度も何度も現れるのだった。あの後に見た「ルミナリエ」を待つ街の様子、「南京町」の人混み－。ひとつの街にそれらがほぼ同時に存在すること、私にはそれがうまく整理出来なかった。

震災の記憶を後世に伝えようとする「メモリアルセンター」と、その前で暮らすホームレスの人々。怒りが湧いてきたり、誰かを糾弾したいのでもない。ただ、あの白いシーツが、そして「光の願い」という言葉が、今も私の中で残響し続けているだけである

［震災・まちのアーカイブ会員］

＊「神戸ルミナリエ」に関しては「神戸ルミナリエオフィシャルホームページ」を参照。
URL　http://www.kobe-luminarie.jp/
＊＊１２月１２日に撮影した神戸の街の様子は「震災・まちのアーカイブ」のホームページ上で公開予定。

◆　◆

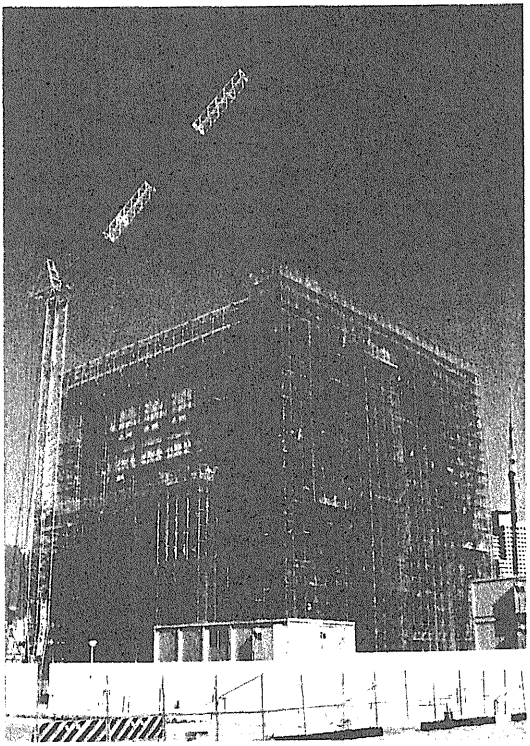
—カンパ・資料提供ありがとうございました—

宮本佳明、辻川敦、倉本綾子、佐賀朝、中西康子、正津房子、大国正美、落合祥堯、西畑康次、高野紀子、北原糸子、河合房子、瀧克則、小山仁示、井上平三、実吉威、小林正治、村尾建吾、匿名希望　（2001年9月～12月、敬称略）

編集後記

■先日、アフガニスタンで医療ボランティアを続けておられる中村哲さんの現地情勢報告会へ行って来た。マスコミは報道しない（できない）アフガンの現実を聞くことが出来た。会場で購入した『医者　井戸を掘る』（中村哲著、石風社）を読む。これも単なる現地報告の書ではない。文明批判の書■その数日後、『NEWYORK　SEPTEMBER 11』（新潮社）を読む。あの「マグナム・フォト」のメンバーが、テロ事件直後のニューヨークを撮影した写真集。その中のある写真家の文章が気になった。それは、【私は言葉を信じない。信じるのは写真の力】というもの■表現の手段として写真のもつ威力と可能性を「信じて」の言だろう。それを読み、言葉に頼りそれを信じてきた自分自身を振り返らずにはおれなかった■私（あるいは私たち）は言葉を信じているのだろうか。それともただ使っているだけなのだろうか。何気ないものであるがゆえ、よく分からない■■もし言葉のもつ何かを信じているとして、私の言葉はどこかに、もしくは誰かに届いているのだろうか。そして逆に、過去から流れ来る言葉と、かたちにならないあまたの「沈黙」を、はたして私は聴きとっているのだろうか。　〔S〕

◇備忘録◇



完成間近の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」

＊2001年12月8日付「神戸新聞」朝刊で「メモリアルセンター」の正式名称が、公募を経て「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来館」に決定したという報道があった。しかし事業主体である兵庫県の正式発表というふうには記されておらず、それ自体不思議な記事であった。

（2001年12月12日／菅洋明撮影）